

伝書鳩

第
26
号



井上靖記念文化財団

半生

井上靖

亡き将棋の坂田八段は、どうにも出来ぬ一角について打ってしまった己が不運な〴〵銀〴〵を見て言った。「ああ、銀が泣いてる！」と。

生涯をひたすら燐光のごとき戦意もてつらぬき、不逞傲岸の反逆の棋風の中に、常に孤独の灯をかざしつづけたこの天才棋士の小さいエピソードを、これも今は亡き織田作之助の短い文章で読んだ時、私は絶えて覚えたことのない烈しい不安を感じて、つと暗い夜のひらく北の窓に立った。

今にして思えば、この瞬間、私は過去半生から復讐の鋭い銛を身内深く打ちこまれたのであった。びようぼう磧のごとき過ぎし歲月、そのおちこちに散乱する私の愚かな所行の数々が、その時ほど鮮やかに私の悔恨を拒否し、過失たることを否定し、私に冷たく背びらを向けて見えたことはなかった。私は己が人生が打ち出した不幸な〴〵銀〴〵たちの慟哭を、遠くに郊外電車の青いスパークを沈めた二月の夜の底に、一種痛烈な自虐の思いの中で聞いていたのだ。

(『北国』より)



半生（詩） 井上靖……………2

ご挨拶 浦城義明……………6

「井上靖作品年表」未掲載・全集未収録作品
月明（解説 勝呂奏）……………8

第八回 井上靖記念文化賞 中川裕氏・斎藤真理子氏に……………26

井上靖未発表資料*10

終戦前後日記④（監修・解説 高木伸幸）……………36

作家「井上靖」と曾祖父 砂野礼至……………66

鳩のおしらせ……………71

令和六年度 事業報告……………72

鳩のカット 福井欧夏
花のカット 黒田佳子
奥付のカット 岩永 泉

今年は記録的な猛暑が長く続いたかと思えば、秋は束の間で、あっという間に冬の寒さへ。四季の移ろいが息つく間もない一年でした。その慌ただしさは、大阪・関西万博、初の女性首相誕生、トランプ関税、中東情勢の緊張など、目まぐるしく変化した国内外の世相ともどこか重なります。

春のある日、滋賀県高月町の渡岸寺を訪れました。小学生の頃に靖に同行した遠い記憶があり、おそらく五十年ぶりの再訪でしょうか。お堂に立つ十一面観音像は記憶以上に大きく、『星と祭』で描かれた「凜としてあたりを払っている威ある美しい女王」の姿そのままに、静かに周囲を圧する存在感を放っていました。渡岸寺からは近い場所には立派な高月図書館があり、その二階には「井上靖記念室」があります。再現された書斎の文机には広辞苑や拡

大鏡が置かれ、懐かしい靖の息遣いが感じられる空間でした。駅前 の 碑 文 モ ニ ュ メ ン ト に も 足 を 止 め、 作 品 を 通 じ て 靖 が 今 な お 地 元 の 方 々 に 親 し ま れ て い る こ と を 実 感 い た し ま し た。

今年度の井上靖記念文化賞は言語学者の中川裕氏、特別賞は翻訳家の斎藤真里子氏が受賞しました。アイヌ語と韓国語。ともに言葉を通じた文化の継承に尽くしてこられたお二人の取組みが高く評価されたものです。

言語を通じて文化をつなぐ営みは、当財団が設立当初よりお世話になっております小西国際交流財団が主催する日仏翻訳文学賞とも通じる精神です。同賞は今年、三十回という大きな節目を迎えられました。賞の設立には靖の遺志が深く関わっており、長きにわたり日仏の文化交流を支えてこられた歩みに、心より敬意を表します。

皆様の温かいご協力に深く感謝申し上げますとともに、今後とも変わらぬご支援を賜りますようお願い申し上げます。

令和七年十二月吉日

月明

〔井上靖作品年表〕未掲載・全集未収録作品

短篇「月明」は、『井上靖全集』（新潮社）「別巻」収録の「井上靖作品年表」未掲載の作品であり、全短篇収録をその方針としていた同全集にも収録されておりません。発表年の一九五三年は、「あすなる物語」などの代表作が書かれた年であり、井上が文壇での地歩を固めようと、旺盛な執筆活動を展開していた時期にあたります。発見者の勝呂泰氏（桜美林大学）の解説とともに、埋もれていた佳作をお楽しみください。原文の旧漢字は新漢字に直し、仮名遣いはそのままとしました。明らかな誤字は断りなく直しています。

不幸な人間といふものは、兎角、他人の不幸にも敏感なものである。

山根はその同窓会の会場へ入って間もなく、十数名の昔の級友たちが寄り集つてゐる中で、どうやら一番うだつが上がないで、不幸を駄いつばいに詰め込んでゐるらしい男に気がついたのである。それが田島だった。

こいつは、どうやら俺より不幸せらしいなと、その

時山根はビールのコップを口に当てながら、一人だけ目立ってしょんぼりしてゐる田島を、それとなく横目で睨んだものであった。

実のところ、山根は田島を見て、吻とした思ひであった。まだまだ、俺の方が少しはましのやうだ。下には下があるものだ。そんなその時の気持だった。

その席は戦後初めて開かれた中学校の同窓生の集りで、山根は、二三人を除いて他の十何人かとは、戦後

初めての顔合せであつた。もうみんな揃つて、来年は四十の声を聞かうと言ふ年齢である。一応才能のある者は、なんらかの形で、才能の花を開かせて居り、それぞれに自分の人生といふものを半ば固めかけてゐる連中だった。

医者が二人、弁護士が一人、その他メリヤス工場を経営してゐる者、新聞社の用度課長、新制高校の教頭、株屋、映画会社の企画部長等々、職業は多岐多様に亘つて雑多であるが、いづれも、社会の表面に頭を出してゐるか、出さうとしてゐる連中許りである。

山根は、これまで戦前にはこの同窓会に何回か出席してゐたが、出席した場合を考へてみると、大体、人生コースが軌道に乗つて、順調な境遇にある時であつた。

「どうだい。近頃」

「まあ、まあだね」

お互いにそんな含みのある言葉を遣り取りするのが同窓会に見る風景だが、さうした中にお互ひに相手の仕事や暮し向きの打診を行つてゐる心理が、どこかに

無意識に働いてゐることは否めない。長距離競走の途中で、ちよつと立ち止まつて、お互ひの位置を知らせ合ひ、確め合つてゐるといつた趣である。

だから、余り逆境にある者は、同窓会には出席しない。学校を出たての数年間には、まだ人生のスタートを切つた許りで、いいも悪いもなく、まだ貧しさが寧ろ自慢の年配なので、虚心に友情を暖め合つて、徒らにへべれけになるまで酒を呑むが、その同窓会の集会が十何回か回を重ねると、順調に人生のコースを走つてゐる者ばかりが集り、とかく落伍者や落目の者は姿を見せない。

この山根たちの同窓会にしろ、東京在住の同窓生は、名簿に依ると、四十数名居る筈だが、集まつたのは僅か十数名である。

山根は戦前は満鉄の東京支社に勤め、順調に一段一段、人生の階段を登つて行つた恰好だったが、それが戦争で何もかも吹飛んでしまひ、現在はこれと言つた職はなく、ある出版社の校正の仕事を手伝つて、妻と二人の子供を養つてゐる。正式の社員ではなく、時々、

その出版社に出掛けて行つては、何か急ぎの仕事でもあつて、社員で手が廻らない場合、その仕事の一部を貰つて来ることにしてゐる。はつきり言へば、仕事のおこぼれを頂戴してゐる恰好で、毎日仕事があるかないかはつきりしない点は、自由労働者と同じである。

だから、山根はこの同窓会に出席するのに、格別心が弾んだわけではない。大体、千円の会費すらが、彼に取つては大変な負担である。これは一ヶ月の生計費の何分の一かに相当する。

その山根が、これに出席したのは、もう少し増しな職業に転じられるやうな機運が、旧友たちの誰かに依つて与えられないものでもないと思つたからである。

併し、この望みは、会場へ一步踏み込んだ瞬間諦めなければならなかつた。就職の依頼など受付けられない明るい賑やかなものが、一座の空気を占めてゐた。誰もそんなじめじめした話をしたり、聞いたりするために集まつて来てはゐなかつた。

「家を買ひたいんだが、適当なのはないか」

「幾らぐらゐのだ」

「どう、田島君」

さう言つて、山根は誰からも除け者にされてゐる彼の方へビールを注がうとした。すると、田島は黙つて、コップを差し出して、それを受けると、ちらつと山根を冷たく光る眼で見た。その眼は、冷酷とも言へるし、傲慢とも言へる変な眼であつた。山根は何となく軽蔑されたやうな嫌な気がした。

風采はひどく粗末である。ワイシャツの袖口が切れてゐるのが、コップを差し出した時、山根の眼に入つた。それに髪は、まだそれ程の年齢でもないのに、半白を越へて、七分通り白くなつてゐる。化粧室へ立つて行つた時見ると、靴は踵が潰れ、いつにもクリームを塗つたことがないらしく、かさかさしたものであつた。

大して愉快な相手ではなかつたが、山根は席が対かひ合つてゐる関係もあつて、この男に何回かビールを注いでやつた。

そして、その度に、この男より、まだ俺の方が倅せさうだと思つた。可哀さうにすつかり人生を磨り減ら

「そこは任せる」

「五六十万円か、百万円ぐらゐか」

「まあ、そんな見当だな」

そんな話が一隅で大声で交はされてゐると思ふと、今度、子供を××大学の中学部に入れてね、相当金を使つたよ、とかそんな話が明るく持ち出されてゐる。

山根は旧友たちと、口ではのんきさうなことを言つて、ビールを注いだり、注がれたりしてゐたが、自分などの身を置くべき場所でないといふ気持が次第に彼の心を暗く重くしてゐた。

田島を見ると、彼は殆ど誰とも話をしてゐなかつた。同窓会に出たのは、中学卒業以来、今度が初めてのことである。性格はもともと胆汁質で、無口で、煮え切らないところがあり、中学時代も一人の友らしい友もなく、いつも教室でも運動場でも、隅の方ばかりに居た男である。

誰もこの田島のことは、はつきりとは記憶してゐない。さう言へばこんな男が居たなと思ふくらゐで、格別彼について想ひ出す材料は持ち合せてゐない。

し、もう何の希望も持てなくなつてゐる。僅かにあるものと言へば、僻み根性ぐらゐだらう。それでなくて、時々、こんな変に冷たい眼付きを相手に投げる筈がない。

山根は田島といふ人物にこんな観察を下しながら、次第に酒の酔ひも手伝つて、何となく彼に対して優越を感じるやうになつて行つた。そして久しぶり味ふ優越が、山根から暗い重い気持を奪ひ取り、珍らしく彼を田島の前で陽気にして行くやうであつた。

同窓会があつて一週間程して、突然山根は田島の訪問を受けた。妻の美代が、田島さんと言ふ方よ、御存じなの？と幾らか眉をひそめながら取り次いで来たところを見ると、田島は初対面の美代にも、余り歓迎すべき訪問者には見えなかつたやうである。

田島は三部屋しかない家の一番奥の、山根の仕事部屋に入つて来ると、いきなり、相変らず冷たい感じのする眼をちらつと田島に向け、
「忙がしいの？」

と訊いた。

「丁度昨日で仕事が一応片付いたところだ。今日はのんびりしてゐる。ゆつくりして行つてくれ」

と、山根は言つた。

「さう、それは有難いな。のんびりさせて貰はう」

と言つて、田島は、部屋の中をあちこち、きよろきよろ見廻しながら胡坐をかいた。

山根は一体、この男は何のためにやつて来たのだらうと思つた。借金か、就職の依頼か、用件はまづそんなところだらうと思ふ。併し、それなら訪問する相手を誤つてゐる。とんでもないところへ飛び込んで来たものだと思つた。

「一体、君、何をしてゐるの」

山根は訊いてみた。

「何もしてゐない。尤も一個二円で、米国に出す胡椒瓶に絵を描いてゐるが、仕事とは言へないやうなものだ」

「奥さんは」

「逃げられた」

はして来さうであつた。

山根は彼のの上に関係する話題を打ち切ると、後は黙つて、煙草ばかり喫んでゐた。共通の話題と言ふものは二人の間には全くなかつた。

田島は自分からわざわざ訪ねて来たくせに、山根の方から話しかけない場合は、絶対に自分の方から口を切らなかつた。十分でも十五分でも、黙つて対かひ合つてゐて、田島は別に氣づまりでも、退屈する風でもなく、時々煙草を灰皿で消したり、消した煙草に又火をつけたりしながら、視線を猫の額ほどの狭い中庭の方に投げ、何か自分だけの思ひの中に入つてゐる風であつた。

一時間もさうしてゐる間に、山根は次第にいらいらして来た。

「何も款待できなくて不可ないね。退屈だらう」

山根が言ふと、

「いや、俺は毎日こんな風にして暮してゐるんだ。退屈なんか一向感じない。俺の部屋からは庭が見えないが、ここからは庭が見える。それだけでもいいよ」

余り相手の言葉が飾り氣のないあけすけなものであつたので、山根の方が戸惑ひした。

「逃げられたつて？」

「いや、本当に逃げたんだ。僕に愛想をつかして、どこかへ行つちやつたんだ」

「子供さんは」

「子供も二人あるが、妻と一緒に連れて出て行つた」

「ほう、で、現在どこに住んでゐるの」

「家か」

「うん」

「家は二三ヶ月前に、家主に追い出されちやつてね。目下、田端の知人の家の二階の一間に置いて貰つてゐる」

山根はもうこの男に何も訊くまいと思つた。何を訊いても、この男から不幸を引張り出すだけの事のやうな氣がした。あらゆる不幸といふ不幸が、この男の軀には際限なくいっぱい詰まつてゐるに違ひなかつた。そしてその不幸の一端をつまみ出すと、それに続いて、ぼろ布のやうに、不幸は後から後からぞくぞく姿を現

それから田島はまた同じ一本の煙草に何度目かの火を点けた。

そして山根がいい加減うんざりした頃、田島は、ここへ来て今までその事ばかりを考へてゐたが、漸く考へがまとまつたので、それを口に出してみると言つた言ひ方で、

「君、銀が泣いてゐると言ふ言葉を知つてゐるか」

と、ぼつんと言つた。

「知らないな」

山根は、銀が泣いてゐるなんて言葉は耳にしたことはなかつた。

「これは亡くなつた将棋の坂田八段の言葉なんだ。盤上に銀を下手法をした時、その銀をにつちもさつちも動かすことができなくなつたことがあつた。その時、坂田八段は、その銀を見て、ああ、銀が泣いてゐると言つたさうだ。銀が泣いてゐる！ どうだい、腹に滲み渡つて来るやうない言葉じやあないか」

田島は説明してから、自分の言葉の効果でも験すやうに、なほも銀が泣いてゐるといふ言葉を何回か、口

の中で低くつぶやいて、眼を山根に当ててゐた。

田島が何のためにこんな言葉を言ひ出したか、田島の真意は判らなかつたが、その銀が泣いてゐるといふ短い言葉の持つ意味は、その時、暗く冷たい陰影を持つて、山根の心に突き刺さつて来た。

「銀が泣いてゐるか！ なるほどね」

と山根は言つた。

「いい言葉だらう」

「いいと思はんが、確かにちよつとやり切れぬものは持つてゐるな」

「俺などは、考へてみると、する事なす事、みんなこの銀の口だ。到るところで銀が泣いてゐるんだ。夜になると、その泣き声が方々から聞えて来る。俺をどうかしてくれ、俺をどうかしてくれつて、実に堪まらん悲痛な声が聞えて来る。俺はもともと絵描きになるつもりだつたんだ。いまはもう諦めてしまつたがね。そんなわけで、何十冊かのスケッチブックや何十枚かのカンバスが、埃りを浴びて、俺の周囲にある。これだけは洋服を質に入れても手放さないでゐる。そいつら

行つた。

山根はやれやれと思つた。貧乏神がやつと退散した氣持だつた。塩でも撒きたい氣持だつた。

山根は、自分の部屋にはいると、

「銀が泣いてゐるか！」

と、口の中に出して言つてみた。

「変な人ね、あれがお友達ですの」

妻がさう言ひながら入つて来た。妻の美代は若い時は美貌だつたが、いまは化粧したことのない顔がひどくやつれてゐる。戦前は中級サラリーマンの妻君として、それ相応の身なりをして、口のきき方にも一種の張りがあつたが、現在は、どうしても、最下級の生活者の内儀さんの顔である。

「ああ、銀が泣いてゐる！」

山根はまた言つた。美代が銀に見えて来たからである。

子供が何にするのか、洗濯竿の折れたのを持つて、汚ない泥だらけの顔で、庭へ入つて来た。山根にはそれが又小さい銀に見えた。

の一枚一枚が、毎晩みんな泣いてゐるんだ。俺をどうかしてくれ、俺をどうかしてくれつて——」

「よさうや、そんな話！」

思はず山根は言つた。こんな話を際限なくやられては堪まらなかつたからである。山根の語調や、その時の表情が、自分でも知らないうちに、陰しくなつてゐたのか、田島は、

「いや、何も、俺は悪氣で言つたのではない」

と、少し弁解する口調で言つて、

「そろそろお暇しよう」

と、腰を上げた。山根は引き留めなかつた。

そして玄関まで見送つて行くと、田島はぼろ靴を履きながら、

「気にしないでくれ。人間、誰だつて、銀を持つてゐるんだ。君許りじゃあない」

そんな勝手に、山根の心の中を推量したやうな言葉を吐いて、ちらつと例の冷たい眼を山根に当てると、田島は酒も飲んでゐないのに、酔つた人間の足のふらつき方で、玄関の格子戸をがたびし言はせながら出て

「銀が泣いてゐる。ちいぢやな銀が泣いてゐる」

口の中でつぶやきながら、山根はぶいと席を立つと、戸外の空気を吸ひたくなつて、玄関から、いま田島が出て行つた戸外へと、自分も亦出て行つた。

二度目に田島がやつて来たのは、それから五日程してからだつた。

「また来ましたよ、田島さんつて方！」

美代が言ふと、

「銀か！」

と山根は言つて、自分で、自分の顔が奇妙に引きつて行くのが感じられた。

併し、追ひ返すわけにも行かなかつた。田島は上がつて来ると、

「この間は失礼！ 昨日も一昨日もやつて来たかつたが、君が忙しいだらうと思つて遠慮してゐたんだ」

と言つて、又、例の冷たい眼を光らせた。

田島はこの前と全く同じだつた。別段、用事もないらしいのに、何か自分一人で考へごとをしてゐるとい

つた顔付きで、庭に視線を投げながら、煙草ばかりを、
けち臭ひ喫み方で喫んでゐた。

山根は、他人の家に來て、のうのうと、妖氣を發散
しながら、時間を潰してゐる昔の余り親しくもなかつ
た級友に腹を立てた。

「君は、この前、銀の話をしたが、さしづめ、君自身
が銀と言つた恰好だな」

と、づけづけと嫌味を言つた。併し、そんな事で一
向に田島の方は動じなかつた。

「さうだよ、俺は自分を銀だと思つてゐる。泣いてゐ
るのは俺自身だ。君はどうだい」

「俺か！」

山根は言つたが、それに対して山根は肯定も否定も
しなかつた。まさに彼自身銀以外の何者でもなかつた
が、銀だと言ふのは癪だつた。

又、この前と同じやうに、田島は一時間余りも庭ば
かり見て、その果に、

「君、京都の龍安寺の石庭といふのを見たことがある
かい」

と、唐突に、そんな話題を持ち出した。

「知らんね」

「それは、機会があつたら、一度見ておくといい。尤
もめつたに機会はないだらうがね」

と、こんな場合にもちくりと嫌味を言つて、

「俺は、あそこへ学生時代よく行つたものだ。広い砂
の庭の中央に何個かの石が並んでゐる。樹木も、草も、
苔もない。ただ何個かの石が真中に並んでゐるだけだ。
だから石庭と言ふんだ。そこへ、俺は学生時代よく行
つたものだ。なぜ行つたかと言ふと、俺はそこへ行く
と、ふしぎに氣持が休まつたんだ。俺は学生時代から
不運続きでね、その頃も、失恋はする、金はない、成
績は悪い。何一ついい事はなかつた。悪いことばかり
と言ふ状態では、あの頃も、決して現在に遜色はなかつ
た。その頃、俺は絶望的になると、よく龍安寺の石
庭へ出掛けて行つて、五錢の觀覽料を払つて、ほんや
り石の庭を見て、何時間も過したものだ。なぜか判る
かい？」

かう言つて、田島は、どういふ意味か、空虚な笑ひ

声を低くたてた。

「判らんね」

と、山根は言つた。判るもんかと、荒く突き放して
言ひたいところだつた。

「それはね。その石庭の持つてゐるものが、俺よりも
つと不幸だつたからだ。考へて見たまへ。石ばかりで
庭を作つてみようなんて考へ出した奴は、決して幸福
だつた人間とは思へないじゃあないか。その石庭を作
つた庭師は、よほど不幸に打ちのめされた男だつたん
だな。だから石ばかりで庭でも作らうと言ふとて、つも
ない了見を起したんだ。俺はその石庭を見てゐると、
自分より不幸な奴を見てゐる氣がして来るんだ。自分
よりもつと絶望してゐる人間を見てゐる氣がして来る
んだ。人間と言ふ者は、哀れなもので、自分より、よ
り大きい不幸に触れてゐると、心が自然に慰められて
来るんだな」

さう言ふと、田島は一つにやつと笑つて、立ち上
つた。

「帰るのか」

「帰る、また来る」

山根も立ち上がった。そして彼はこの前と同じやう
に、田島を引き留めなかつた。

田島を送り出して、暫くしてから、山根の心に徐々
に怒りに似た感情が立てこめて來た。

田島の言葉が、重く鉛のおもりのやうに山根の心
中に垂れ下がつてゐた。それは追ひ払つても、追ひ払
つても、どこへも行かなかつた。

あいつは、俺の家へ、自分の不幸を慰めに来ていや
あがる！ それに違ひないと思つた。そして、自分の
不幸と田島の不幸とを計量器にかけて見ると、なるほ
ど、自分の不幸の方が少し許り大きいかも知れないと
思つた。妻君にも子供にも逃げられてはゐず、彼程貧
乏ではなかつたが、なぜか不幸といふ点では、彼より
自分の方がより大きい不幸に取り憑かれてゐるやうな
氣がした。

どこが、あいつより不幸なんだらう。さう考へてみ
たが、山根にはつきりとその正体は判らなかつた。

田島が三度目に、山根の家に姿を現したのは、それから更に五日程経つてからだつた。

その時山根は出版社へ仕事を取りに行つて不在だつた。美代が玄関で留守だと言ふことを告げると、

「上がつて待つてゐませう。別に用事はないんですから」

と、田島は言つたといふことだつた。

「随分、図々しい人だと思つたわ。私、上げませんでしたの」

と、美代は明らかに不快な顔をして言つた。

「嫌な奴だな。併し、あいつの事だから、又やつて来るかも知れない」

と、山根は言つた。実際そんな気がした。今にも、

田島が玄関の格子戸でも開けさうに思へた。

そして、この田島がやつて来さうな予感、夕食後まで続いた。もう田島と面と向き合つて坐つてゐるのはごめんだつた。

山根は、ふと、田島が最初来た時、自分の住所を何か紙片に書きつけて行つたことを思ひ出して、それを

探してみた。

山根はその地図を頼りに、彼の許を訪ねて行かうと思つた。そして彼と会つて、もう交際はいつさいごめんだと言ふことを、先方へはつきり伝へようと思つた。あの貧乏神の訪問を受け、その度に時間を浪費し、不愉快な後味を残して行かれては堪まらないと思つた。

紙片に書きつけてある省線の田端の駅で降りて、半時間程かかつて、山根は漸く田島が部屋を借りてゐる小さい煙草屋を見付け出した。

煙草を売つてゐるのは七十歳ぐらゐの老婆で、階下には、後は誰も居ないらしかつた。

田島はがたびし音を立てる階段を降りて来て、山根の姿を見付けると、

「やあ！」

と、ちよつと驚いた風だつたが、

「上がれよ」

と言つて、そのまま再び階段を上がつて行つた。

汚い乱雑な六畳の部屋だつた。部屋には筵が敷いてあつた。そしてその上には絵具皿三四枚と、絵筆が二

三本並んでゐる。そして片方には小さい硝子瓶がいっぱい詰まつてゐる箱が置かれてあつた。彼は今までその真中に坐つて仕事をしてゐたものらしく、その自分の席に立つたまま、

「まあ、そこらに坐れよ」

と言つて、戸棚から酒の瓶を取り出して来た。

「よく来てくれたな。祝盃を上げようじゃあないか」

さう田島は言つた。

何の祝盃か判らなかつたが、山根も言はれるままにそこに坐つた。

山根は、何となく絶交の最後通牒を出しそびれた形で、黙つて茶碗を口に運んでゐた。

山根の家に於けると同様に、二人の間には話題はなかつた。なるほど、ここからでは庭が見えないので、田島は庭の方へ視線を投げる替りに、時々眼を潰つてゐた。

酒は安酒で、微かに嫌な臭気があつたが、それでも、飲んで行くうちに、その臭気は失くなり、酔ひが徐々に軀全体に上つて来た。

田島は、茶碗の酒を、口の中にぶちあけるやうに、荒い飲み方で飲んでゐた。そして山根の何倍かのピツチで、忽ちにして酒瓶を空にすると、

「待つてゐてくれ！」

と言つて、座を立つて行つたが、十分程すると、新しい酒の瓶を持つて来た。酒のレッテルが瓶にはつてないところを見ると、前と同じ安酒らしかつた。

その二本目の瓶が半分程になつた頃、田島は、突然、

「いい奴だな、君は」

と言つた。

「あまり信用されると困る」

と山根は言つた。山根は絶交の通牒を出すことを、まだ諦めてはゐなかつた。得体の知れぬ安酒で買収されてなるものかと思つてゐた。

「いいや、いい奴だ！俺にはよく判る。金がほしいだらう。堪まらなくほしいだらう。併し、幾らぢたばたしても、金は入つて来ない。苦しいな。ほしくて、ほしくて堪まらないな。金の事を思ふと、胸の中がきゅつと締めつけられたやうになり、堪まらなく佝びし

い気持が腹の底の方から突き上げて来る。君の気持はよく判る。朝一回、昼一回、夜、床に入ると何回も――」

「もう、よせよ」

「だつて、さうじゃあないか。俺にはよく判るんだ。俺がさうだからな」

田島は少し酔ひが出た顔で言つた。山根には、今夜の田島の言葉は、ふしぎに不快ではなかつた。

「また、俺には判るんだ」

と、田島は言つた。

「俺を見ると、君は貧乏臭ひ何と嫌な奴だと思ふだらう。俺はこいつよりまだましだと思ふだらう。なるべく、こんな一文の得にならん奴とは交際したくないと思ふだらう。俺にはよく判るんだ。やはり俺がさうだからな」

「もう、いいじやあないか？」

「よくはないさ。人間と言ふものは、みんな同じことだ。だが、俺はそんな気持が嫌なんだ。どうかして、そんな気持でなくなりたいんだ。だから、俺はわざわざ、同窓会の中で、一番惨めな影を持つてゐる君を訪

ねて行つたのだ。君の方では、一文の得にもならん奴が訪ねて行つたんだ」

「なるほど」

山根は初めて合槌を打つて、田島の茶碗に酒を注いでやつた。

「つまり、銀が銀を訪ねて行つたんだ」

田島は、さう言つて、眼を細めて笑つた。いつもの冷酷な、意地の悪い冷たいものは、その瞳から消えてゐた。

「ところがね、行くことは行くんだが、行つてからが不可ない。何と可哀さうな奴だと君を思つてしまふんだ。そして、君の方は君の方で、同じことを俺に感じてゐる」

「つまり銀の意地みたいなもんだな」

山根は、ここへ来て、この時初めて言葉らしい言葉を口から出した。ふと心がほぐれた気持だつた。

「くだらない銀的精神だな」

「さう、石庭の思想でもある」

山根も言つた。

それから又二人は黙つて酒を飲み出した。二本目が空になつた時、

「金を出せ！」

と田島は言つた。

「よし」

山根は言つて、内ポケットから百円紙幣を何枚か出した。

それを掴むと、田島はふらふらした足取りで部屋を出て行つた。田島が出て行つて暫くしてから、窓の硝子戸を開けてみると、十月の、満月に近い月が、これだけは立派な大きな銀杏の木の上に出てゐた。月光がさつと部屋に流れて部屋の三分の一程を青白い光が埋めた。

窓から眺めると、一面の空地になつてゐて、昼間見ると、小工場と小工場に挟まれた何の取柄もない空地らしいが、この時、山根には掃き潔められた清潔な広い庭に見えた。

やがて、その広場のずっと向かうから、一つの人影が現れた。小さくて判らなかつたが、それは、どうや

ら田島らしかつた。

近寄つて来るのを見ると、それはやはり田島だつた。着物を着て、両手で一升瓶を捧げ持つやうにしてゐる。

田島は広場の真中頃のところで、ちよつと立ち止まると、月を仰ぎながら、一升瓶を口に持つて行くやうにした。彼は立ち飲みしてゐるらしかつた。

「田島！」

山根は、窓から身を乗り出すやうにして、田島の方へ声を掛けた。

田島の耳にも、その声は聞えたらしく、田島はちよつと周囲を見廻してゐたが、やがて、右手で瓶を抱へ、左手を上げて、山根の方に合図した。

そして半間程歩くと、石にでもつまづいたのか、ぱつたり子供の転ぶやうな転び方で、田島の倒れるのが見えた。

起き上がった田島の手には瓶はなかつた。壊れてしまつたものらしかつた。手ぶらの田島は、棒のやうにそこに突立つたまま、月の方へ顔を向けてゐた。それが山根の眼に妙に清潔で印象的だつた。

解説

勝呂 奏

井上靖は、昭和文学を代表する国民作家である。芥川賞を受賞してのデビューは四十二歳と、決して早くなかったが、亡くなるまでの四十年余りに、膨大な著作を残している。それは没後刊行の『井上靖全集』が、全二十八巻別巻一を数えることに理解されよう。これは文献の博搜で知られた曾根博義の手で編集され、詳細を極めた「井上靖作品年表」を収録しているが、この種の仕事に遺漏は付きものである。そこで新たに見つかった著作については、その都度紹介されてきている。今回ここに紹介するのは、それこそ運に恵まれて発掘することを得た作品である。

少し事の次第を明かすなら、インターネット上の古書店で井上靖作品の載った雑誌を探索して出て出会ったのが、大蔵財務協会発行の雑誌『明窓』の一九五三年一月号（三巻十号）掲載の短篇小说「月明」である。

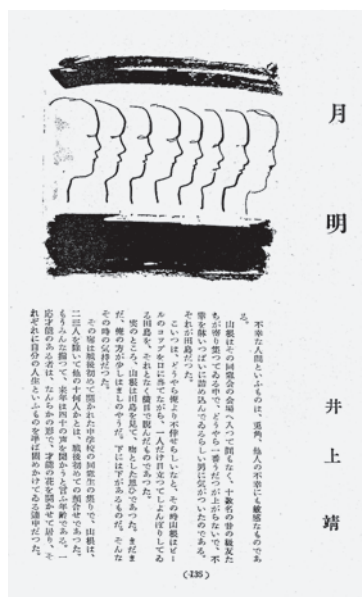
巻頭を大蔵大臣の文章が飾り、官庁の会計担当者が手に取るような固いものの並んだ巻末に置かれている。一読してなかなかの佳作で、「井上靖作品年表」に洩れていたことが不思議でならない。これを発端に埋もれた作品の探索に熱が入り、続けて講談社発行の雑誌『少女クラブ』の同年一月増刊号（三十一巻二号）に掲載の童話「赤い実」を、これも運よく見出すに至っている。

このように発掘した井上靖の短篇小说と童話のそれぞれ一篇は、偶然にも同年同月発行である。これらの作品を書いていた頃の井上靖は、芥川賞受賞から丸三年、早くも人気作家として読書界に名を馳せている。長篇小説「あすなる物語」や「風林火山」を連載する時期に当たり、その充実振りには眼を瞠らされる。ここでは紙数の関係から「月明」のみを再掲載し、「赤い実」については簡単な紹介に留めることにする。

「月明」は冒頭に「不幸な人間といふものは、兎角、他人の不幸にも敏感なものである」という箴言風の一



掲載誌『明窓』（1953年1月号）の表紙



「月明」の冒頭ページ

故浜口雄幸首相を想う……………中島彌因次(電)	地方債物語……………迫水久常(電)	「オйкаヨサン」事件でつまづき……………那須良輔(電)	独立予算の実態……………駒田閑多(電)	人事行政実情……………樋上亮一(電)	公務員制度を生かすもの……………樋上亮一(電)	国家公務員共済組合法の解説……………中野盛夫(電)	質疑……………柳沢英藏(電)	財政法改正の大要……………柳沢英藏(電)	支那の「一部改正省令案」……………小澤孝次(電)	規程等……………小澤孝次(電)	新代議士をめぐって(座談会)……………(金院)自植木庚子(電)	新代議士をめぐって(座談会)……………(金院)自植木庚子(電)	時世の問……………羽柴忠雄(電)	大衆の主人……………大井廣介(電)	寄席の正酒……………安藤鶴夫(電)	年五た三誓う……………保谷藤子(電)	小説……………井上靖(電)	懸賞論文募集……………(電)
-------------------------	-------------------	------------------------------	---------------------	--------------------	-------------------------	---------------------------	----------------	----------------------	--------------------------	-----------------	---------------------------------	---------------------------------	------------------	-------------------	-------------------	--------------------	---------------	----------------

『明窓』の目次(部分)。「月明」は巻末付近に配されている

句を置いている。そして、戦争で定職を失って出版社の校正の仕事で妻子を養う山根が、中学校の同窓会に出席したところから始まる。

山根はその同窓会で同席した、自分よりも不遇を託^かつて見えた田島の訪問を受ける。その時「君、銀が泣いてゐると言ふ言葉を知つてゐるか」と、将棋の坂田八段の言葉を投げ掛けられる。山根はそれが胸に響いて、次の訪問の時に「君自身が銀と言つた恰好だな」と嫌みを言うが、田島は肯いて「君はどうだい」と問い返してくる。それを認めたくない山根に田島は龍安寺の石庭について、石だけで庭を造つてみることを考えた人間は幸福だったとは思えないと話し、「自分より不幸な奴を見てゐる気がして来るんだ」と言う。山根はその話に、田島が訪ねて来るのは自分を慰めるためだと思えて怒りを覚える。

数日して山根が絶交を伝えるつもりで田島を訪ねると、「いい奴だな、君は」と迎えられて酒を汲み交わすことになる。田島は人の不遇を見て自分の方がましだと思ふのが嫌で、だからわざと山根を訪ねたと明か

して「銀が銀を訪ねて行つたんだ」と語る。そして、それを「くだらない銀的精神だな」と自嘲すると、山根はその真意を理解して「石庭の思想でもある」と応じる。

この梗概から井上靖の愛読者のすぐに気付くのは、「獵銃」（一九四九年）や「漆胡樽」（一九五〇年）等の短篇と同様の、初期作品に珍しくない創作法の用いられていることだろう。それというのは井上靖自身も詩集『北国』（一九五八年刊）の「あとがき」に認めるように、一度散文詩に書いたものを形式を変えた小説に生かしていることである。「月明」で言えば、それは「半生」（一九四七年）と「石庭」（一九四六年）の二篇である。「半生」の将棋の坂田八段のことが、「石庭」の龍安寺の石庭のことが、作品の肝になって取り込まれている。その意味で「月明」は、極めて井上靖らしい特色を見せる短篇と言える。なお、「石庭」については同題の短篇（一九五〇年）が知られているが、「月明」により見るべきものがあるだろう。

ところで、「半生」に坂田八段の言葉を織田作之助

の文章で知ったとあるのは、「可能性の文学」（一九四六年）のことである。織田は「日本の伝統的小説の権威」に挑戦することを言い、結びで「小説本来の面白さ」を求めている。それが想起させるのは、三好行雄との対談「作家の内部——井上靖氏に聞く」（一九七五年）で、「獵銃」の執筆を「何か新しい、楽しい、美しい小説を書きたいという気があった」とする回顧である。この井上靖の思いは織田のものと一脈を通じて、「月明」にその一端を現わしている。

また、そこに提示された山根や田島の「銀的精神」「石庭の思想」を生きる人物像にも注意が払われよう。井上靖の文学の特質に「傍観者」的人物を逸早く指摘したのは山本健吉の「深い孤独の影——井上靖論」（一九五二年）であるが、その眼は「月明」の登場人物達にも注がれている。

次に童話「赤い実」は、村の小学校へ通う武夫と東京から来た中学生のけい子のお話である。武夫は隣りの時夫と、冬になって赤い実を餌にしたわなでひよどり

を捕る遊びをする。けい子はそれを「かわいそう」と咎め、秘かにわなにキヤラメルを挟んで邪魔する。ある朝、わなにひよどりが掛かって弱っていると、けい子は武夫に「介抱するから」と申し出て貰い受ける。武夫はひよどりがかわいそうになって、けい子にわなは止めると謝って打ち解ける。

この内容から井上靖の作品をよく知る読者は、『続しろばんば』（一九六三年刊）のほとんどん焼きと鳥のわなの場面を取り出した、中学校の国語教材「赤い実」を思い出すだろう。両者は似た設定を持ちながら、狙われているところは同じでない。『続しろばんば』ではわなのひよどりは死んでいて、洪作は自分のした残酷さに気付いて、女の子の心の感じ易さを初めて知る。つまり、少年の心の苦い成長が捉えられているのであるが、一方の童話では武夫とけい子の子供心の温かな通い合いにこそ焦点がある。掲載誌の目次に「純愛小説」と謳われている理由は、恐らくここに求められるだろう。愛すべき子供の読むことを念頭に、井上靖がよく練った作品である。

第八回 井上靖記念文化賞

中川裕氏・斎藤真理子氏に

井上靖記念文化賞について

一般財団法人井上靖記念文化財団では、平成五年から「井上靖文化賞」を実施し、小澤征爾氏やドナルド・キーン氏など、各分野において顕著な実績を残された著名な文化人に賞を贈ってきましたが、平成十九年の第十五回を最後に中断されていた経緯があります。旭川市と井上靖記念文化財団の連携により、平成二十八年に設立した「井上靖記念事業実行委員会」では、これまでの文化賞の流れを汲みつつ、新たな視点を取り入れて制度を再構築し、優れた作品や活動実績を有し、またその活動を通じて継続的に地域や社会への貢献を行い、これからの更なる飛躍が期待される個人または団体を対象とする「井上靖記念文化賞」を創設しました。

た。

井上靖が数々の名作を生み出し、日本を代表する作家となった足跡や、生涯にわたり各分野の芸術家と交流を持ち、文化芸術への関心と情熱を持ち続けたその業績と遺志を継承する本賞が、各地で活躍されている方々や団体の更なる飛躍のきっかけとなり、更なる文化の発展に寄与することを期待します。

第八回井上靖記念文化賞の選考委員会は、令和七年三月十五日に東京都内にて、贈呈式は、令和七年五月二十四日にアートホテル旭川（北海道旭川市）にて行われました。

第八回 井上靖記念文化賞

中川 裕（ながわ・ひろし）

言語学者

贈賞理由

中川裕氏はアイヌ語、アイヌ文化の専門家として、その構造と歴史を深く研究した。だが、専門領域にとどまらず、それを「生きた言語」、「生きた文化」として、現代日本の社会に提供した。専門と啓蒙。学者・研究者としての真価が現れる。



受賞のことは

アイヌ語の「活保存」のために

文学者井上靖氏の名を冠した賞ということですが、私にはいささか唐突だったが、受賞理由のひとつとして「（アイヌ語を）「生きた言語」、「生きた文化」として、現代日本の社会に提供した」ということが挙げられていたので、ありがたうお受けすることにした。

私は大学在学時に北海道平取町で、フチ（おばあさん）やエカシ（おじいさん）から初めて直接アイヌ語を教わる機会を得たが、後に静内町（現新ひだか町）の葛野辰次郎氏から「死保存」「活保存」という考え方を聞かされた時から、和人の研究者として「活保存」つまりアイヌ語を現代社会の中で生きた言葉としていくにはどうすべきかということを考えるようになり、いろいろなことを実験的にやってきた。それはアイヌ語の同人誌だったり、いわゆる語学教材の作成であったり、野田サトル氏の漫画『ゴールデンカムイ』への協力であったり、あるいはアイヌ民族文化財団の「アイヌ語

「動画講座」の企画編集であつたりした。

その成果があつたかどうかはわからないが、これまでアイヌという名前を聞いたことがある程度だった大勢の人たちが、アイヌ民族の文化や歴史に関心を向けるようになり、アイヌ語やアイヌ文化を学んでいくという現状が確実にある。今回の受賞がさらに関心を持つ人を増やしてくればありがたい。

それとは別に、私は千葉大学において今から三十年前に、釧路出身の金子亨氏らと「ユーラシア言語文化論」という講座を立ち上げた。そこではアイヌをはじめ、シベリア、モンゴル、中国の少数民族などを中心に、その言語・文化の研究・教育を行ってきた。それはまさしく井上靖氏が『蒼き狼』や『敦煌』など、文学で追求してきた領域と重なるものであり、その意味でも、私はこの賞を自分がいただくことは、アイヌ語で言うカムイレンカイネ（カムイのはからい）ではないかという気もしているのである。

活動の概要

言語学者、アイヌ語研究者。一九五五年神奈川県横浜生まれ。東京大学大学院人文科学研究所言語学専門課程（修士課程）修了。同専門課程（博士課程）退学。東京大学在学中から北海道でアイヌ語を採録。アイヌ語、アイヌ文学の研究、教育に従事。漫画『ゴールデンカムイ』でアイヌ語・アイヌ文化の監修を行った。東京大学文学部助手、千葉大学文学部講師・助教授を経て一九九九年同学部教授、人文社会科学研究所長などを歴任する。二〇二一年同大学名誉教授。

主な著書・受賞歴

一九九五年 『アイヌ語千歳方言辞典』草風館（金田一

京助博士記念賞受賞）、『アイヌ語をフィ

ールドワークする』大修館書店

一九九七年 『アイヌの物語世界』平凡社ライブラリ

1

二〇〇七年 『カムイユカラでアイヌ語を学ぶ』（中本

ムツ子との共著）白水社

二〇一〇年 『語り合うことばの力——カムイたちと

生きる世界』岩波書店

二〇一九年 『アイヌ文化で読み解く「ゴールデンカ

ムイ』集英社新書

二〇二〇年 文化庁長官表彰、『ニューエクスプレス

プラス アイヌ語』白水社

二〇二四年 『ゴールデンカムイ 絵から学ぶアイヌ文

化』集英社新書、『アイヌ語広文典』白水

社

選評 アイヌ語は、**〴〵**活かしている

川村 湊

「アイヌ語ってもう滅んだ言葉じゃない。そんなものを勉強するって意味があるの？」

確かに今の日本では、アイヌ語を母語として、日常的に使っている人は皆無だろう。第二言語として、ある程度喋れる人や、単語レベルで、知識として知っている人が、ごく少数いるだけだろう。アイヌ語、アイヌ文化の研究者である中川裕氏は、アイヌ語を勉強す

る目的を三つ挙げている。一つ目は、アイヌのアイデンティティを持つ人たちが先祖の、そして自分自身の言葉を取り戻そうとすることだ。二つ目は、アイヌの人々が長年伝えてきた伝承や歌や物語を知るためだ。三つ目は、言語学者や言語愛好家（？）にとって、アイヌ語はつきせぬ興味を掻き立てるものだからだ（『アイヌ語広文典』白水社）。金田一京助、知里真志保、久保寺逸彦といった研究者たちの系譜に、中川裕氏は連なっている。

だが、そうした学者たちと彼が違っているのは、中川氏が、現代の日本の社会の中で、アイヌ語を復権させようとしていることだ。具体的には、野田サトルの『ゴールデンカムイ』のアイヌ語を監修することや、その漫画作品を通じて、アイヌの民俗文化、世界観、思想そのものを広めようとしていることだ。どんなに高邁な学問的業績であっても、「面白くない」ものは、やがて廃れてしまうだろう。もちろん、「面白い」だけでもダメだ。学問的厳密性と、大衆的啓蒙性とを兼ね備えなければ、その知識、教養、学問的成果は、〴〵活

たゝものとはならないのだ。

アイヌの人々が踏み分けた道を、私たちはもう一度踏み辿っていかなければならない。それは自然の恵みである山の獣や海の魚たちと共生し、川や沼や湖の水を汲んで生活することだ。そんな暮らしを送るために、中川氏が教えてくれるアイヌ語は「生活の杖」となる。



第8回 井上靖記念文化賞 特別賞

齋藤真理子（さいとう・まりこ）

翻訳家

贈賞理由

齋藤真理子氏は韓国文学が日本で多くの読者に受け入れられるきっかけを作った翻訳の第一人者。

激動の韓国現代史の中で、暴力によって生命や家族を失ったり、理不尽な人生を歩まざるを得なかったりした弱い立場の人々に光を当て、共感を広げた。



（撮影：増永彩子）

受賞のことは

旭川とのご縁

このたびはすばらしい賞をいただき、心から御礼申し上げます。

井上靖先生は朝鮮半島を舞台とした『風濤』を書かれましたし、三浦綾子先生の『氷点』は、韓国人が最も愛する日本の小説といって過言ではないほどよく読まれています。私は今、日本の文学作品を韓国に紹介している翻訳家のチョン・スヨンさんと雑誌に往復書簡の連載をしています。チョンさんが『氷点』の新訳を手がけておられるそうで、楽しみにしているところでした。さまざまに旭川とのご縁を感じます。

また、受賞のお知らせをいただいたのは、私が翻訳を担当した韓国の作家パク・ソルメさんの短編集『影犬は時間の約束を破らない』（河出書房新社）が刊行されて間もない時期でした。ここには「旭川にて」という作品が入っています。日本語版の刊行に際して著者が特別に書きおろしてくれたもので、子供時代から高

校生になるまで北海道に住んでいた韓国人女性が、旭川の知り合い一家と今もつきあいを続けている様子が出てきますので、重なる偶然に驚いた次第です。

昨年ノーベル文学賞を受賞したハン・ガンさんをはじめ、現在の日本では韓国の文学作品を読む機会が増えました。しかし、一般の読者が非常に少なかった時代から、ここつと朝鮮半島の文学の紹介に努めてきた翻訳家たちがいらっしやいます。戦後間もなく、まずその道を切り開いたのは在日コリアンの方々でした。こうした長い積み重ねがあつて、今があります。

朝鮮半島の文学を知ることが、その歴史を知ることになりません。先輩方の努力を知る一人として、翻訳仲間たちと一緒に、相互理解のための一助となるよう努めて参りたいと思います。ありがとうございます。

活動の概要

韓国語翻訳者、編集者。一九六〇年新潟県新潟市生まれ。明治大学文学部史学地理学科卒業。

大学のサークルで朝鮮語を学び始め、一九九一年から一年半、ソウル延世大学語学堂に留学。二〇一五年パク・ミンギュ『カステラ』で第一回日本翻訳大賞受賞。二〇二〇年に韓国文学翻訳院の第十八回韓国文学翻訳賞文化体育観光部長官賞を受賞。

二〇二四年度ノーベル文学賞受賞者で韓国の小説家ハン・ガン氏の作品（『別れを告げない』白水社、二〇二四年など）も翻訳している。

主な著書・翻訳書・受賞歴

二〇一五年 パク・ミンギュ『カステラ』クレイン（日本翻訳大賞受賞）

二〇一六年 チョ・セヒ『こびとが打ち上げた小さなボール』河出書房新社

二〇一八年 チョ・ナムジュ『82年生まれ、キム・ジヨン』筑摩書房

二〇一九年 チョ・ナムジュほか『ヒョンナムオッパへ 韓国フェミニズム小説集』白水社

（韓国文学翻訳賞文化体育観光部長官賞受賞）

二〇二二年 『韓国文学の中心にあるもの』イースト・

プレス（増補新版、二〇二五年）

二〇二三年 『本の葉にぶら下がる』岩波書店

二〇二四年 ハン・ガン『別れを告げない』白水社（読

売文学賞、翻訳・研究部門受賞）、『隣の国の人々と出会う——韓国語と日本語のあいだ』創元社

選評 生きるための支えとなる隣国の文学

佐々木学

書店で海外文学の棚を見ると、韓国の小説や詩の本が多く並んでいる。「韓流」は音楽や映画だけでなく、文学も人気だ。背景には韓国政府の文化輸出支援がある。さらに、朝鮮半島の歴史や文化を深く理解し、韓

国語の文学世界を日本語で表現する翻訳家の存在は大きい。斎藤真理子さんは、その第一人者だ。

斎藤さんは、激動の韓国現代史とともに各時代を象徴する文学作品を紹介した著書『韓国文学の中心にあるもの』で、日本の韓国文学熱を次のように記した。

「不条理で凶暴で困惑に満ちた世の中を生きていくための具体的な支えとして、大切に読んでくれる人が多いことに気づいた」

日本の植民地支配と解放後の南北分断、同じ民族が殺し合った朝鮮戦争、長く続いた軍事独裁政権による抑圧、苦難の末に勝ち取った民主化の一方、競争と格差が激しい社会で、家族を守って必死に生きる人々を、韓国の小説家や詩人は描いてきた。隣国の私たちは登場人物に自らを重ね「困難に直面した時、どう生きるべきか」と考えてしまう。

韓国女性の生きづらさを描いたチョ・ナムジュ著『82年生まれ、キム・ジヨン』は、日本の女性読者に「これは私たちの物語だ」と共感を広げた。資本家が貧しい人々を搾取する七十年代の家族の物語『こびとが

打ち上げた小さなボール』（チョ・セヒ著）は、経済の低迷で非正規雇用の増えた今の日本社会で切実に響く。そして昨年、ノーベル文学賞に輝いたハン・ガンの小説『別れを告げない』は、歴史の悲劇で命を絶たれた人々の無念を忘れないと誓った祈念碑と言える。斎藤さんの翻訳作品が、つらく苦しい今を生きるために私たちの支えとなっている。植民地支配を巡る歴史認識で真の和解がまだ遠い日韓両国を結ぶ相互理解のかけ橋となればいいと願わずにはいられない。

『敦煌』『孔子』などの著作で東アジアに共有する文化を基に日本を見つめた井上靖の名を冠する賞を贈るのにふさわしい。

第一回受賞者

菅野昭正（世田谷文学館館長・文芸評論家）
小田 豊（六花亭製菓株式会社前代表取締役社長）

第二回受賞者

芳賀 徹（東京大学名誉教授・国際日本文化研究センター名誉教授）
織田憲嗣（東海大学名誉教授・東川町文化芸術コーディネーター）

第三回受賞者

大城立裕（作家）
伊藤一彦（歌人・若山牧水記念文学館館長）

第四回受賞者

宮本 輝（作家）
岡野弘彦（歌人・國學院大学名誉教授）

井上靖記念文化賞・選考委員会委員

川村 湊（文芸評論家・法政大学名誉教授）
栗原小巻（女優・日本中国文化交流協会副会長）
佐々木学（北海道新聞社文化部長〔当時〕）
高橋源一郎（作家）
建畠 哲（美術評論家・詩人・埼玉県立近代美術館館長）
（五十音順）

第五回受賞者

熊川哲也（バレエダンサー・Kバレエカンパニー芸術監督）
藤原良雄（株式会社藤原書店代表取締役社長）

第六回受賞者

吉増剛造（詩人）
山本ひろ子（和光大学名誉教授・私塾「成城寺小屋講座」代表）

第七回受賞者

石内 都（写真家）
安彦良和（漫画家）



終戦前後日記

4

一九四五年一月一日～二月二十八日

本連載は井上靖の妻・ふみの没後、長男・修一がその遺品を整理した際に発見した未発表の日記・書簡・原稿・その他の資料を、別府大学教授・井上靖研究会会長の高木伸幸氏に監修をお願いして、順次紹介していくものです。

一九四〇年一月十六日から一九四六年四月四日までの日記帳三冊の紹介を進めています。連載第十回では、一冊目の日記帳の最後部にあたる一九四五年一月一日～二月二十八日の期間を公開します。長女を伊豆の実家に預け、妊娠中の妻、長男、次男と、大阪・茨木の自宅で暮らしていますが、日本各地に空襲が相次ぎ、連日に及ぶ空襲警報に苦しめられる様子が日記からうかがえます。命すら脅かされる状況のなか、靖は防空壕の完成を急ぎ、家族の疎開先探しに奔走しています。

原文の旧漢字は新漢字に直し、仮名遣いはそのままとしました。明らかな誤字・脱字・衍字・句読点の漏れなどについては、断りなく直しました。今日の人権意識からすると不適切な表現がありますが、時代背景を考慮しそのままとしました。

(昭和二十年)

一・一 有史以来の非常の年昭和二十年の元旦を社の宿直室(梅田ホテル)で迎へる。昭和十三年天津で正月を迎へた時以外、家で越年しなかつたのは今年が初めてだ。八時床を離れる。晴れてゐるが寒い元日である。朝食はさすがにお粥はやめて御飯だが、餅是一片もなし。九時半、在郷軍人会の拝賀式、十一時社全体の拝賀式。十一時の時は四升樽をぬぐが、十分位でなくなる。伊豆の父〔実父・井上隼雄。退役軍医〕母〔実母・やゑ〕と幾世〔長女〕へ年賀状を書き、辻氏と茨木の家へゆく。非常時乍らとも角正月の御馳走一通りできてゐる。餅は暮の卅日京都でウル餅にして五升搗く。鶏は少い乍らふみ〔妻〕が病院で知り合つた閨屋の小母さんから入手したもの、みかんと小芋は大鉄沿線上太子駅から半里程ある村に二晩つぶして買出しに行つた賜物。それから牛蒡は家の畠、人参は天野さんからの貴物。黒豆は五月丹波で貰つてきたもの、それ〴〵労苦が秘められてゐる。串柿は千古〔ふみの長兄・足立千古(ちふる)〕兄よりのお歳暮。小豆は湯ヶ島より貰つたもの。辻氏とは話題なく面白くない。四

時頃、明さん〔長妹・石川静子の夫〕の兄さん、石川佳一氏思ひがけず訪ねてくる。砂糖五百匁と羊羹十本、みかんなど時節柄凄いい土産を携へてくる。福の神といふ他なし。西宮の子科練の主計長。十時頃まで話す。顔と気立も明さんと瓜二つ。

一・二 九時まで寝る。寒いが午後、京都へ年賀。吉田〔京都市左京区吉田にふみの実家がある〕へゆくと平日より取りちらかつてゐる。千代ちゃん〔ふみの〕、卅日の餅つき後風邪で臥床の由。おばあさん〔義母・足立ヤン〕二軒かけ持ちで忙しい。文次郎〔ふみの次兄〕兄子供二人連れてくる。おちいさん〔岳父・足立文太郎〕は元日と大晦をとりちがへたと語る。八十一歳だから無理はない。風邪気味で火鉢のそばに円くなつてゐる。書初を頼まうと紙を持つて行つたが、やめて帰る。帰途、(堂本)五三郎氏の家へ立ちよる。卓也〔次男〕入院中のお札を兼ねて、蜜柑、珈琲、童話の本持つてゆく。雪ちらちらしてゐる中を夜七時帰宅。

一・三 今日浦上〔『現代先覚者伝』の共著者で、同僚の浦上五六か〕君と瀬川

君の来る日だが、防空当番なので九時出社、出勤簿に印をおし、十一時退社。帰宅すると瀬川君来てゐる。「新文藝」一月号を持つてくる。同君の「花火」五十枚が巻頭を飾つてゐる。十二時頃浦上君来る。食事後、炬燵で話す。浦上君少々の酒にいい気嫌、瀬川君五時頃帰る。浦上君九時まで。辻さんの時と違つて今日は愉快なり。一時頃空襲警報出たが、出社を見合す。夜半二時半再び警報出たので、昼の罪滅しに出社、五時帰宅。

一・四 事業部の大橋君来るといつたが、待呆け。面倒になり社を休み、瀬川君の「花火」をよみ乍ら風呂焚き。夜警報のサイレン聞えたが直ぐ眠つて終ふ。

一・五 午後二時出社。阪神ビルで斬髪。居残り七時帰宅。例により満腹するまで喰べたり、のんだり。このところ牛乳一斤一合づつ貰へる。朝伊豆の父、幾世より賀状。十二月七日発送の小包六日に到着の由。不着とあきらめてゐたものがついたので気持よい。

でも、最もいい味のでたもの、構へも臭さもこれには少しもなく、少し欧米的な一殊の香気がある。貴族的な美しさをどこかに持つたもの。四時辞去、吉田に立寄り、大谷〔千代が嫁いだ大谷敏夫家〕に見舞にゆく、千代ちゃんしきりに戦局を心配してゐる。敏夫さんのことが案じられるのだらう。帰りがけに玄関の前で防空壕に落ち込む脛をすりむく。吉田の家でトロロを御馳走になり、箸を貰つて帰る。十時、二時、五時三回サイレン鳴るが、そのまゝ寝てしまふ。

一・九 家の掃除をし終ると石川佳一氏訪ねてくる。餅、つくね芋、菓子など沢山持つてくる。夕食たべて行つて貰ふことにし、一時間半で帰宅するつもりで社に出る。「建設」〔担当している読者投稿欄〕のことが気かりなので――。吹田で警報、大阪駅で空襲のサイレン。大忙しで仕事をすませ三時半帰宅すると、石川氏も警報発令と同時に帰つた由。勤め柄、致し方なし。四時半解除。このところ名古屋は連日連夜、大阪はそれのけんせい。

一・七 日曜風寒し。昼、家の片附。夕方より芦屋千古兄宅へ年賀乍ら訪問、文与〔千古の長男〕工場で鉄板に足を押へられかつがれて帰宅した許りのところへ行く、元氣もよく大した事なし。牛乳、珈琲、オウス、蜜柑等持つて行く。一合の酒に酔ふ。京都の千代女史、肺炎になつてゐる由聞いて愕く。九時半辞去、芦屋の夜道はひどく淋しい。

一・八 午後一時河井寛次郎氏訪問、一昨日電話にて約束しておく、堂本〔印象〕氏に社より贈る記念品（帝室技芸員任命の祝ひ）を頼みにゆく。河井氏は印象嫌ひ、印象氏また河井氏のを認めないと思ふが形式的な品だからこれでいゝと思ふ。他に三四百円で適当なものなし。河井氏宅では例により河井氏の郷里の風俗、伝説、生活何でもござれ追想記風に書いたものを讀んで聞かされる。河井氏らしい見方の面白さがある。三百円で壺一個貰ふ。別にこれは私に美しい筈一個貰ふ。煙草入れにして丁度いゝ蓋物。氏のものの中

一・十 昨夜は警報出ず静かだつた。一時出社、五時帰宅。出社しても「建設」の仕事だけが、他の連中は全然仕事なし。社会部も暇らしい。それに、夜、昼の警報頻発で自然出社時間も減茶苦茶。みんな出たり出なかつたりいい加減だ。午後の大本営発表は敵のルソン島上陸を伝ふ。この大事件を大事件として感ずる感覚は一般から喪はれて終つたのか、話題にもならぬくそ度胸ができたのかも知れぬが、とも角、たれもがどん感になつたことは争へぬ。どんな二月がくるか、三月がくるか解らぬ。「建設」の投書をよんでゐて、農村からも、都会からも真面目な生活の苦痛を訴へてくるもの多いのには心痛む。

一・十一 防直なので四時出勤。火の気ない編輯局はひどく寒い。点呼前風呂で暖まつて一眠り。西部東部地区は警報が出たさうだが、こちらは何事もなし。

一・十二 八時起床。一先づ帰宅。「建設」出稿してないし、二時から部会あるので午後再び出社。亀貝長

太郎氏、静子より便り。堂本氏より来洛の折立寄つてほしいといふ端書。部会例によつて怠屈な雑談、明日、小林君の会に各自が砂糖と野菜持寄ることを約束し六時帰宅。夜半地震あり、大分長いので子供たちと玄關に出る。今年はいろんなことのある年だ。三日の爆撃には名古屋は去年の暮の大地震の余震に遭つた由、地震、爆撃と名古屋市民はさぞ大変だつたらう。十日には大阪築港に爆雷の椿事あり、軽傷者を入れると二千人を越すといふ、天変地異続々たる感じなり。炬燵入れてねたが寝苦し。国の運命、自己の運命など交々去来す。伊豆、木本の竹本〔毎日新聞社熊野通信員で友人の竹本辰夫〕君留守宅、大陸の竹本君三人へ手紙出す。

一・十三 小林君の会があるので、畠の大根四本と椎茸、砂糖少量持つてゆく。社で三時より各部研究会で黒崎とかいふ防衛本部の少佐の話をきく。一見まだ三十そこゝ位の青年将校。頭もいいしその話し方も真面目で好感が持てる——比島は結局立ち打ちできぬが、こゝで時を稼ぎ、本土決戦の日に備へるといふ。

のむ。それから歩いて堂本さんの家へゆき、四郎〔印象の弟〕さんと雑談。戦局におびえ切つてゐる。印象氏の例の如き、儀礼用の絵を貰ふ。それから吉田に廻る。おぢいさん大分むくんでひどく耳が遠くなつてゐる。相変らず寸陰を惜んで仕事してゐる。殺気だつて怖ろしい位。学問に執する人の姿。なんといつても敬服の他なし。闇の米一升五合（二十五円で五升買つてあるものうち）、全じく闇の砂糖二斤（一斤六十五円也）、その他野菜貰つてかへる。米と砂糖は伊藤さんより世話して貰つたもの。兄弟及び吉田で砂糖十斤、文さん〔ふみの次兄足次郎〕と自分とで米一斗。代金は暫時拝借。おばあさん立替へてくれる。八時帰宅。寒さ甚し。伊勢神宮爆撃の発表あり。

一・十六 今日石川さん（西宮航空隊）来る日、午前準備、御馳走はこの前貰つたトロ口芋とお餅。こちらが御相伴に与る次第なり。一時出社、「建設」出して文化研究会、サイ藤、藤田、富岡、関田、小林信司、辻六名出席、雑談だが斎藤時局を憂へて新聞記者は反省

話の途中で席を外し、小谷〔「闘牛」の津上のモデル・小谷正二〕君、永松君等と日展へゆく。日展四階が会場、鶏は小林君が用意してある。三百匁程、ウイスキー、ビール、まづ満足できる。気のおける奴がいないので愉快なり。十一時まで気焰を上げ、節分の日、もう一度開宴することにして散会、帰宅十二時。

一・十四 九時まで眠る。日曜出勤なので一時出社。一時半警戒警報発令、間もなく空襲警報、何編隊も北上、大阪を通過して、みな名古屋に向ふ。一昨夜の地震〔三河地震〕で、名古屋はまた倒壊家屋六千といふ。このところ散々の態なり。水谷さん、野々村さんの家はどうしてゐるかしら。四時警報解除とともに帰宅。風呂沸し。

一・十五 正午京都へ。河井氏電話、壺の箱まだ出来ぬ様子、予定変へて、電話で打合せておいて、〔菊池〕契月氏宅、印象氏宅訪問、契月氏風邪で、隆志〔契月の次男〕氏に会ひ、平野の絵依頼、三年越のもの、今日漸くた

すべしといふ。一日休刊して（モヤシ）、新しく出直せといふ。語調真剣なり。社内での男だけが真面目なり。四時散会と同時に帰宅。石川さん来てゐる。炬燵で飲んだり喰べたりしながら雑談。のんきな主計大尉なり。十一時泊ることに決めると間もなく警戒警報発令、ラジオ故障中で情報不明なり。空襲警報出ないので、石川氏度胸をきめて泊ることにする。一時半就寝。下村悦夫氏来社、竹本君の代りに木本通信部の通信員になりたい由、地方部へ話してやる。ネーブル貰ふ。浦上君より油二合ほど。社での煙草の配給九個。

一・十七 五時起床、ふみは三時半、石川氏朝食そこゝに帰隊。水泳つて出ないので天野さんまで水汲み。朝が早いので、いつになく早く片附く。炬燵して日記、一時出社。出社して昨夜の警報は京都爆撃と聞く。渋谷附近で爆弾数個落下、死者五十数名、一丁四方倒壊の由、河井さんの家の近く。併し河井さんの家はなんでもなかつた様子、辻氏、森守明氏などいづれも近し。堂本五三郎氏宅も近い。

一・十八 一時出社、建設月報をプリントに出す。樋口さんよりオコゼ十二円五十銭で買ふ。新聞記者の閨屋、言語道断だが助る。小さい餅一ケ一円、三十個持つてゐるが、買ふ気にならぬ。五時帰宅。九時就寝、十二時と五時二回警報発令。爆撃らしい音がしたので、十二時の折、身掙へして眠る。防空当番だが、出社する気にならず、眠つてしまふ。幾世を三月迎へにゆかねばならぬが、果してそれができるか、どうか――。

一・十九 雨何日にも降らず井水涸れ、ポンプ上らず、おまけに寒気きびしいためこゝ数日、お隣りの井戸は午後三時頃にならないと使へぬ。毎度天野さんまで汲みにゆく。時々大奥さん、若奥さんが運んでくれる。若奥さんの必死な表情でバケツを下げてくる表情は一寸美しい。不幸が美しく身についてゐる。野菜当番、何日か目で貰へたものはシヤクシ菜一軒分ほど、これを十二軒に分けるのには愕く。晴天。一時出社。間なく空襲警報、阪神初の大空襲、八十機程で主とし

て店を開いてゐるのは二、三軒。物といふ物はすべて失くなつて終つた。暮方防空壕の側壁を作るために薪の太い奴を打ち込む。夜は例によつて九時就寝。

一・二二、一・二三 今日防直なので四時出勤。家の片附。産婆さん来る。組長のエビ原さんの長男応召の由。出社すると異動の張出が出てゐる。誰も何ともいはないので昇進してゐないのかと思つてゐると、浦上君やつて来て、おめでたうをいふ。発表をみると、自分と松見君、一月一日附で副参事に昇格してゐる。

社会部では須古君一人、経済部では影林君、他の人に比較すると拔群なり。大低十年以上。八野井がおめでたうと言ひにくる。八野井より四ヶ月後れたわけだがこれで対当なり。平井君、菅沼君等未昇格、一寸悪い気がするが致し方なし。これで六月の異動に副部長になれば申し分なし。文化部でも豊田君、植村君、小西さん等先輩大分不満らしいが、已むを得ない。夜、入浴して直ぐ就寝、夜半小便におきてまた眠る。四時半警報発令、全然知らず、大橋君が解除になり五時半

て明石の工場地帯を爆撃。四時解除。帰宅すると茨木上空で空中戦展開したらしく、飛行雲従横無尽で美しかった由、夜二回警報、寝てゐる。

一・二〇 一時出社、「建設月報」のプリント長谷万に持つてゆく。樋口金信氏より十五円也のアナゴ百匁。夜分、二回警報。

一・二一 日曜。午前家の掃除。ひどく寒い。炬燵作る。八野井氏鹿倉〔吉次〕重役の子供と二人の連名の記事、このところしきりにのる。世渡りのうまい奴だが、どちらが将来まともな生活ができるか考へると一寸面白い。辻修二、八野井実等、何も持つてゐない連中がどこまで泳ぐか二人の将来を見るだけでも人生は興味がある。戦争で何もかも振出しに戻ることもないとは限らぬが――。

金が二、三千円ほしい。印象氏の絵でも売れるといゝが、時局がこゝまで緊迫すると絵どこではないらしい。夕方、洗濯屋に洗物を持つてゆく。途中の商店

頃、帰つて来たので初めて知る。とんでもない防空当直なり。点呼の時病気を理由に断る。午前、プリントを取りに長谷万へゆく。帰途三越に立寄る。何ものもなし。帰社すると間なく空襲警報発令、当番なので警固班の三階の詰所に詰める。毎日寮の前に立ん坊三十分。雲低く爆音は聞えるが敵機の姿見えず。四時半解除。相当機数だが大阪市内には投弾せぬ模様なり。夕方帰宅。夜七時また警報発令、間なく解除。家、野菜一物もなし。五日目にあつた今日の配給はみかんだけ。万難を排して買出しにゆかねばならぬ。夜警報発令。

一・二四 夜、警報出て、淀川河口、中河内郡爆撃さる、併し家では熟睡中で知らず。朝、防衛召集のしらべ来る、卅日まで茨木町の役場へ出すことになつてゐる。

一・二五 十時半家を出て京都へゆく。京都で空襲三ヶと内容のある壕詰一壕と代へるといふので、空襲十二三個吉田に持つてゆく。昼食御馳走になる。おち

近い感じ。飛行機の急降下の音までわかる。初めて不安を感じる。

一・三一 ふみ、病院で知り合った闇の小母さんより、「ハマチ」と「イカ」を多量に仕入れてくる。愕く。樋口君の値段に比べると嘘のやうに安い。ハマチ一匹八円、イカ一匹八十銭、全部で卅五円五十銭。樋口君より買ったとしたら三百円程ならん。

二・一 九時家を出て、魚持つて辻氏宅へゆく。昇進昇給のお礼。一時間程狭い二階で話す。それから大谷と吉田へ「はまち」半分づゝ。吉田で昼代りにパン御馳走になる。七百円の防空壕作るとして、もし金、融通つかぬ場合は、一時立替へて貰ふことにする。三時帰宅半月程前より聞えなくなつたラジオ持つて社にゆき、松見君より聞いて電送の佐野さんといふ人にみて貰ふやう頼んでおいてくる。夜、又爆弾投下音する。

二・二 宿直、小林君を訪ねるために早く出社。神

人たち待避してくる。修一〔長男〕位の子供もゐる。見てゐて気の毒だ。敵機、紀州白浜附近より引返し聞もなく解除。今度は安心して八時までぐつすり眠る。

二・三 大したことなく防直明けて吻とする。日頃の精進がいゝのだと、防直員口口にいつてゐる。「建設」三回分出稿、旅費積算、斬髪、給料前借。田村質店へゆき印象の「菊」持つてくる。田村の小母さんと嫁さん、空襲でやつれてゐる。「井上さん聞いて下さい」といつて、二人で話す。聞き役になつて三十分。疎開したいし、といつてなか／＼家もたゝめぬ様子。社に戻り、ラジオの様子をみに電送課へゆく。佐野さん機械を箱より出してくれる。きれいに掃除して直つてゐる。みんなが非常にいい器械だといふ。真空管二ヶだけでも五百円はするといふ。七年前五、六十円で買ったものが、今は家庭ラジオとしては滅多にない贅沢品だといふ。ラジオ屋に持つてゆくと軍へ供出させられるといふ。七時帰宅。久しぶりでラジオの音をきく。八時、警報発令、早速ラジオ役立つ。敵一機、一

戸に行かうとすると事業部より電話で小林君来社する由助る。二時より部会、戦局談話し。それに連夜の大坂爆撃で大分みんな参つてゐる。小林君と十分程、喫茶店探すがないので、閉店時のビーコンで五分程、席を借りて話す。絵三枚で千二百円ほど、デパートの美術部の人か骨董屋に紹介と依頼する。自分が買つていゝやうな口吻り、吻とする。別に八野井に庶民金庫の印をたのむ。これらも思つたより簡単に二三日で借りられる由。窮すれば通ずるとはよく言つたものだ。これで防空壕も予備金もでき、借金も払へさうだ。点呼後直ぐ眠るつもりだが、やゝ不安で眠れぬ。大阪市民の心の疲れがうなづける。これに比べると茨木は有難い。警報と同時に待避できるやう、手筈きめて眠る。八時頃の定期便は幸ひに來なかつた。但し伊豆、東京地方は警報発令。さすがに眠り浅く二三回めざめる。五時遠くの警報サイレンで眠ざめる。同宿の事業部の花房君を起すと、サイレンは鳴つてゐたといふ。さういつてゐる途端、近くのサイレン喚き出す。脱兎の如く、支度して四階より駆け降りる。北区の近くの家の

時間程あちこち旋回し、最後に京都府木津附近に投弾して南方へ脱去する。二三日分の日記認め十二時就寝。

二・四 日曜、晴、寒い。午前警報発令二回、なんとなく大空襲でもありさうな気持だが、約束してあるので、神戸の小林君のところへゆく。印象さんの「菊」〔さくらに馬〕、〔森〕守明さんの「花鳥」。都合三点、千二百円でとつて貰ふため。省線乗車間なく警戒警報。大阪駅に行くとすでに空襲警報。甲子園口、尼ヶ崎附近、西宮等あまりいい気持しない。六甲道で下車するなり人通りのない街路を走つて日展にゆく。日展には不完全な地上壕あるのみ。日展社員、あまり気持よくないらしい。みんな浮かぬ顔してぶら／＼してゐる。小林君一人悠々として下駄を作つてゐる。三階で画を開いてゐると待避信号。といつても待避壕の屋根はトタン一枚、果して入つてゐる方が安全かどうかたれも顔を見合す。結局は入つたり出たり。外で空を見上げてゐる方が多い。爆音、機重音、空を掩ふこと一時間半、一編隊が明石方面にゆくと、次の編隊、それが去

ると又その次といった具合。後で知つたが八十五機が神戸市を集中攻撃してゐたのである。主として兵庫港附近の工場（川崎三菱）。四時半解除。千二百円小林君より貰ひ、小林君の家で牛肉の御馳走になる。米の粉をつけて油であげる。美味しい。ハイボール三四杯、昼の神経の疲れか、ひどく酔ひ、一時間程眠る。めざめると寒くてたまらぬ。そのうちに又、警報発令。あはて、辞去。襟まきを忘れて了ふ。省線六甲道で折角来た電車にのりそこなう。幾分酔つてもゐたが、真暗くて、わからなかつた。お蔭で更に卅分待つ、そのうちに解除になる。十二時帰宅、ふみ心配してゐる。帰宅寝ようとしてゐると又警報、間もなく敵機投弾の音がある。（神戸に投下とラジオ伝える）

二・五 二時出社、京都へ文化研究会の講師を探しにゆく予定のところ、遅くなつたのでやめて出社。永松君に先月の小林君の会の会費四十円。五時帰宅。八時頃警報、深夜、暁方と都合三回、防直は樋口さん。気の毒なり。いづれも大阪方面に投下音聞え、不気味な

二・七 今晩二時警報発令、三時半までお蔭で起きる。一機は神戸西部の山中に爆弾投下、更に廿分おいて他の一機神戸港に投弾。解除になつてから眠る。癪に触ること夥し。八時起床。九時頃より雪降り出す。本降り模様でしん／＼とつもる。寢室を座敷に決め、ラジオを座敷に移す。寝てゐてスイッチひねれるやうにする。二時出社。四時退社。雪降りしきる。家へ帰ると、ふみと修一乳を取りに行つて帰つてきたところ。修一、留守番が嫌で、ゴリ押しについてゆき、往復、結局裸足で歩いたといふ。夕食后、又、警報発令。雪降りのせいか四国より引返す。又、どうせ夜半に起きることだらうから早くねる、九時半。竹本君より便り。竹本君の方がはるかにのんきなり。

二・八 夜半三時十五分前警報発令、神戸の北方、篠山地方に投弾、五時、神戸市内、元町に投弾、いづれも茨木上空には来らず。睡眠不足。暁天動員なので八時半家を出る。小林君、待避が寒いので参つてゐる。

り。待避壕を作る金はできたが、肝心の植木屋の八夫さん、姿を見せぬ。これを当にしてゐると、一つの事かわからぬのでかりに自分で作ることにする。敵機も然ること乍ら、配給一物もなく、このところ四五日、おかずはオカカのみ。

二・六 午前警報。大阪の方角に投弾の模様、午後一時京都へ。直ぐ支局にゆき須古新次長に文化研究会の会場を探して貰ふことを依頼、それから〔京都〕大学へゆき、高坂正顕に会ふ。高山〔若男〕西谷〔啓治〕両氏を誘つてくるといふ。十三日（火）と日を決め、吉田へゆく。おちいさん喘息で夜になると苦しらしい。一昨日は死にさうな騒ぎだつたらしい。砂糖代百三十円払ひ、百十五匁四十円二十五銭のおそろしく高いアメを買ふ。コブを貰ひ六時帰宅。おちいさん、いつ死ぬかわからぬので酒をのんでおかうといふ。結局は自分がのみたいらしい。帰宅后、木原さん宅で常会、途中警報で中止、神戸方面に投弾の模様なり。投下音殷々たり。

「建設」出稿して正午前に退社。家で燈火管制の暗幕を直し、防空壕の土嚢作り。炭俵を動員して、土を入れ、側壁とする。一貫張りの机を屋根とする。雪の翌日でいい天気なり。今日より九時就寝とする。神戸は県庁前にも落ちたといふので、本田さん愕いたことだらう。元町は大丸前、千古兄の会社の近くなり。今朝の新聞は敵、マニラ北郊に侵入を伝ふ。

二・九 暁方三時一寸前に警報、神戸西北山間部に投弾。その後眠れず、九時起床。二時出社。議会をみて来た藤田信勝君、事態の容易ならざるを語り、家族の疎開をすゝめる。実際毎夜の警報にはやり切れぬし、大阪近郊は危いと思ふ。現在はB29の通路には当つてゐないが、それも一、二分カーブを遅くすれば、頭上を通ることになる。やはりこの際疎開しようと思ふ。電話で約束しておいて、四時社にゆく。退社時刻四時なので、社員殆どゐない。三十分程疎開について話す。千古氏も疎開さすといふ。兄弟なるべく一緒のところにし、早急に疎開先を探すことにする。居残り。七時

帰宅。夕食終ると警報、神戸港沖合及び大阪南部に投弾。十時半就寝。

二・十三 三時警報、阪神に投弾せず名古屋に向ふ。四時半又警報、大阪東部に投弾、またお蔭で一時間ラジオと首つ引。今日は社の裏手に勤労奉仕の壕掘り。これが市街戦の壕掘りだと、うんざりするだらう。併しさうした日が来るかもしれない。一時警報、大編隊なので覚悟してゐると、東京方面にゆく。百機群馬県下の太田（中島飛行機所在地）を空襲したとのこと。「建設」。文化研究会の件で、京都支局と高坂正顕氏のところへ電話。六時帰宅。明日は日曜で風呂沸しの予定。

二・十一 八時起床。昨夜は珍らしく警報出ずのんびり眠る。今日は日曜、紀元節、午後風呂沸し、夕方急に家族をどこかに疎開さすまで、京都でお産させることに考へが落着き、天野さんに離れ家を貸してくれるかどうか訪ねにゆく。天野さんの方でも好都合らしい。この家に天野さん一家が入り、主家をよそに貸し

に「わしが死んだら、お前一人でどうする」といったとおばあさん語る。千古さん、文さん共に親不孝だどつく／＼思ふ。おぢいさん、若しものことあれば、おばあさんは自分が引受けるつもり。帰り十分程大谷に立寄る。大谷でも疎開はしたし、どうにもならぬといった恰好なり。九時帰宅。

二・十三 昨夜警報発令、敵機茨木上空を飛んだらしいが、全然知らず一家眠つてゐた。これが一番いい。八時家を出て「佐阿弥」にゆく。高坂正顕、高山岩男、西谷啓治——京都学派の連中、定刻十一時に集る。新聞社側十二時。みんな市電にのれず四条大宮より歩いた由。三時まで座談会、いっになく熱のあるいい会。御馳走も相当なもの、幹事として費用の点一寸気にかゝる。五時一応帰宅、防直なので七時出社。間もなく警報発令、大阪上空に敵機来たが投弾せず。十時就寝。

二・十四 昨夜はどうせ二三回起されると思つたが、

度い様子。離れは悦んでかせるといふ。自炊の辛さは身にしてみゐるが、この際致し方なし。それにこれから春に向ふので幾分助る。大きい荷物は一先づ安藤に疎開させようと思ふ。夕食後風呂に入らうとしてゐると石川さん訪ねてくる。海苔、らつきよう、アスパラガスの鰯詰、焼ノリの罐、ノリ、チャコ、栗、赤飯、鰻頭等、例によつて福の神さま。九時四十分まで駄弁る。明さん同様、軍人らしからぬ軍人さん。途中警報出るが敵機奈良附近より東方に向ひ間もなく解除、石川さんを駅まで送り帰宅暫くすると又警報、山科附近より東方にそれ、解除、今日は二回共投弾せず。十二時就寝。

二・十二 十二時出社、円山「佐阿弥」に明日の会の炭を持つてゆかねばならず早目に出社したが、結局二時半になる。佐阿弥により、大学へゆくが高坂正顕氏帰宅して会へぬ。五時、吉田へゆく。おぢいさん毎夜、心臓性喘息で苦しむ様子、ひどく弱つてゐる、気の毒なり。この冬が越せないかもしれぬ。おばあさん

遂に敵機来ず、気になつてゐたのか、二回めぎめたが、その都度、やれやれ。伊豆へ疎開決定を通知、「建設」出稿、正午、千古氏に会ひに同和火災へゆく。千古さんの家では文与の学校で、まづ難点にぶつかり、結局疎開できぬといふ。兵庫県、岡山県を二三当つて貰ふやうたのむ。二時帰宅。夜八時警報発令、大阪南部に投弾、投下音遠し。

二・十五 十一時家を出て安藤へゆき、荷物をあづかつて貰ふ交渉する。既に二階を人に貸すことになつてをり困るらしいが、結局応接間を空けて貰ひ、大きいもの数点、あづかつて貰ふことを約す。オミソのおはぎ御馳走になる。米の配給、四日もおくれ困つたといふ。主食の配給がおくれるやうなことが既に起つてゐるのかと、どきりとする。安藤でも、養子の兵隊さん、鹿児島より出動どこに行つたかわからぬといふ。どこの家も根もとからゆすぶられてゐる。帰りに駅までくると空襲警報、大編隊らしいので、「建設」気になるが、すておいて、家へ帰る。茨木の上空一面の飛行

雲、その先端に眼に見えるかみえぬ位の友軍機が動いてゐる。主力は名古屋に向ふ。一時間程で空襲警報解除、四時出社、建設ぎり／＼に出稿、小林満君に、篠山方面に家を探して貰ふことを依頼する。七時帰宅。配給のスルメ嚙り乍ら、珈琲、十時就寝。

二・十六 夜半二時警報発令爆弾投下（有馬附近）の音が硝子を震はした由だが、私もふみも知らない。天野さんから聞いて愕く。午前中天野さんの離れをみて、壕の位置を決める。一人住ひにはもつてこい。二時出社、東京方面艦載機五〇〇機に襲はれてゐる情報、四時より部会、暗し。写真部の金沢特派員の比島脱出談を辻氏より又聞く。六時帰宅。武藤金太氏より鯛の折詰貰ふ。久しぶりで美味い。

二・十七 神経過敏になつてゐるか、何回もめざめる。珍らしく警報発令せず、新聞見ると延千機関東南部、静岡地区、艦載機来襲を報じてゐる。いよ／＼本土戦場化。午前中何はおき、作りの壕のエン蓋を

二・一九 暁方の警報知らずに八時まで眠る。やはり身体の芯が疲れてゐるのだ。寒い日。京都に行く予定だが中止、午前中建設、三時出社、武藤金太氏と駅でお茶、珍らしく強気になつてゐる。日本処理案の発表デキ面なり。戦争は実際これからだ。

二・二〇 ひどく寒い。霰降つたり陽が照つたり。今晩三時警報発令。大阪へ侵入せず脱去。その後眠れず。ふみは夜半二時までモンペ作り。京都の父に会ひにゆくために外出用のモンペ。午前風呂の水汲み、風があるので沸すのは延期。二時出社。十九日硫黄島へ敵上陸の由、戦局きびし。フランス敗れたりの如し。日本生命へお金を払こみにゆく。居残りだが六時に社を出る。樋口氏より白米一升。（一升三十円也）。今日より天野さんの離れの前に壕造り、植木屋さん仕事はじめる。四百円なり。大阪市に比べれば大分安い。疎開のことで、社から千古さんに電話するが、どこも予想通りなし。今井のおばあさんの郷里といふ丹波の西脇といふ所、当にしてゐるが、望うすし。今井家自身が

作る。九分通り竣功。正午一寸前警報発令、当番だが壕作りの方が大切なので駆付けず、一時解除、B 29 茨木上空をも通るが、どこへも投弾せず、三時出社、六時まで。敵硫黄島上陸開始の情報、辻氏より聞く、戦局の前途暗たんたるものあり。電車に乗つても人々のすべては苦渋にみちた顔付でちつと何かを考へつめてゐる。

二・十八 昨夜は珍らしく敵機来す。硫黄島戦線で忙しいのだらう。昨日も艦載機六百機関東を襲つた由、新聞でみる。午前中防空壕、漸く完成す。牛蒡抜く。午後京都に小父いさんの見舞にゆく。縁側へ上ると多勢ゐてたゞ事でない空気。おぢいさん二三日前よりひどく悪い由、げつそりやつれてゐる。千代ちゃん、節子さんが看病、一時間程、指をもんでやる。家も心配なので七時帰る。市電乗車中警報発令。真暗い省線で九時帰宅。間もなく解除。十一時警報、大阪南部八尾に投弾。

疎開地探しに忙しいらしい。少国民〔大阪毎日新聞社発行の「少国民新聞」とか〕の瀬川君の家でも丹波方面を探してゐるといふので、もしあつたら連れて行つて貰ふやうたのむ。気ばかりあせるが致し方なし。茨木の家は燃料からいつでも、水のない点からいつでも、まさに破産の形なり。

二・二一 軍の勤勞奉仕で七時、天野さんと東浦前に集合、茨木町、三島村と一隊を組織し、春日村の裏手の用地に出掛け、ドラム罐の地下貯蔵壕を掘る。兵隊も来てゐる。ひどく寒い日だが、働き出すとさほどでもなし。十九の古兵に三十九の新兵、共に喰べる話のみ。将校、下士官の配給物横取りの話、腹がすく話、自分の兵隊当時には夢にも考へなかつた話ばかり。世の仲間様軍隊もひどく変つてゐる。五時終了。帰宅後、修坊〔長男、修一〕と入浴してゐると警報 B 29 一機、方々旋回して投弾せずして東へゆく。勤勞奉仕中、三島村の人より米の供出の苛酷な話をきく。村の割当料に達しないので保有米全部を出し還元配給をうける者大部分、最もいゝものでも五月まで保存米のある家はあるまい

といふ。警官の役得の話。何か、あらゆる方面に末期的な暗さを感じる。天野さんと暗タンたる思ひで国の前途を憂ふ。明日常会、一悶着あるべし。家の疎開も気ばかり焦る。瀬川君の家に依頼してあるほか千代ちゃんの家にもた女中、かずえさんの家、志楽を頼んでみようかと思ふ。十時就寝。

二・二二 三時出社、夜常会、案ずるよりは生むは易し。次期組長解消の理由を説明、皆、無理もないと思つてゐるのか、一言半句の文句も出ず。主人の居ない家を抜かして、佐藤さんといふことになる。佐藤さんの奥さん、迷惑さうだが致し方なし。なんとなく押しつけられた形。エビ原さん住友の話、食べものの話例によつて一人で愉快さうなり。十時散会。これで長い間気になつてゐた難問も解決。今年は万事うまくゆく年だ。

二・二三 ふみ、疲れてゐて京都ゆき中止。代りに社を休んで見舞にゆく。おぢいさん少しよいらしく、

二・二四 珍らしく警報出でず熟睡する。昨日の電報で十二時出社、建設の注意処分でなくて、不敬事件に対し憲兵隊より協力を申込んだと長岡氏云ふ。一日なすことなし。憲兵隊の曹長面会、石川さん面会、石川さん本を返し乍らパンを持つてきてくれる。有難し。夜入浴。東京は警報発令。十時事業部の大橋君と話し乍ら眠る。サツカリンを頼む。和辻〔哲郎〕「風土」を廻して貰ふことにする。

二・二五 警報出でず、嫌に静かだと思つてゐたら雪、しんしんと降りつもつてゐる。東京に艦載機来襲の電話。野村君と話してゐると、野村君に応召の電報来る。愕く。大雪、大橋君、昼食抜きといふので気の毒になり、家へ連れてくる。七八寸の雪、昼食、珈琲、お茶——炬燵に当り乍ら駄弁つてゐると警報、大編隊の空襲、修一、卓也、ふみを防空壕に待避させると、大阪方面に爆弾の投下音、いんいんと聞えてくる。やがて頭上に大きい爆音、居たゝまらなくなつて、二人共

食欲でた様子、眠つてゐるので会はずに帰る。節子さん四時の汽車で熊本へ帰る由なので、千代ちゃんより頼まれて護国神社の「長谷川」でオウス五十匁買つて届けるつもり、二時半に、吉田の家を出たのだが、電車なか／＼来ず途中歩いたり乗つたりして駅につくと丁度四時で間に合はぬ。折角の気持何もならず不快なり。帰宅すると社より電報で明日正午出社せよ、建設についての用あり、と。多分今回掲載の「強力政治断行の秋」が注意処分なのだらう。今日は一日労多くして効なき厄日なり。

併し千代ちゃんに志楽のかずえさんの所へ電話をかけて貰ふことを頼んだから、まあ、それだけが仕事。一度志楽を訪ねて直接頼んでみるつもりなり。おぢいさん、少し快くなつたら、おばあさん、千代ちゃん等が絶えず枕頭につめかけてゐないので不服と言つて困る由、子供のやうでおかしいが、気持はわかる。壕掘りの植木屋に、家具と米との交換の斡旋を頼む。脈あり。紙面は硫黄島の激戦を伝ふ。昨日あたり漸く寒さおさまり春の陽射しなり。

壕に飛び込む。狭いがどうにか這入れる。雪の日の待避、風流の極みなり。五時大橋君帰る。駅まで送る。夜になりて止む、腹すく、米の追加物凄し、二日分一升五合をこのところ一日でたべてゐる。雪解けの音高し。夜のラヂオは東京にB 29、艦載機合同の大空襲ありしを伝ふ、昼の空襲はその牽制なりしなり。

二・二六 警報出でず、二時出社、ビーコンより珈琲、(一ポンド二十四)。武藤氏より日東紅茶二ヶ、神戸より買つて来て貰ふ。「橋本」関雪の急逝をきゝ驚く。「関雪を悼む」を書く、一時間程で脱稿したので気に入らぬが仕方なし。夜「建設」、二ヶ月、社会面記事として書く。東京二万戸焼失の報入る。

二・二七 午前「建設」の記事、二時出社、文化研究会、小林、富岡、辻、井上の四人戦局談、八野井單純な時局樂觀論披露。夜、五日の生活科学の講演の草稿作る。

二・二八 昨夜も警報出でず。このところ全部硫黄島作戦に参加してゐるのだらう。天野さんの壕を庭に掘るので、否応なしに麦コキ。座敷でやる。大分鼠に喰はれてゐるが、五升や六升はとれるだらう。家の壕は大体完成、四百円仕払ふ。莫迦らしくなる。三時出社、瀬川君煙草をくれる、一本もない折柄有難し、「光」五個とマツチ。大橋君「風土」と空鐘、印象より短冊。七時まで放送局より送る地方原稿。米四日分足らず、今日は予備の白米。うまし、白さ尊し。瀬川君の親戚の家（旧家で農家）が古市在にありそこに疎開を交渉してくれてゐるといふ。人の情有難し。明日より三月、今夜は春の宵の感じ暖し。

[illegible][illegible]

爆弾の投下音でめざめ、「非常に近い感じ。飛行機の急降下の音までわかる。初めて不安を感じる」と記される(1月30日)。日記には空襲や警報についての記述が増えていく

[illegible]

しの、あかんじ、小事は犬鑑録、縁上、子肥、子羊、肥、
 子、和、二、此、つ、ふ、に、愛、習、し、に、妙、う、大、揚、物、。毛、ぬ、り、草、
 葉、は、家、の、草、。人、亦、は、五、跡、と、い、ひ、さ、う、實、物、。寛、政、は、五、月、
 丹、路、に、實、つ、て、さ、左、の、の、水、（、警、署、か、跡、の、）水、と、大、
 の、事、瑞、月、か、太、え、う、り、か、最、盛、。水、は、は、端、う、島、と、い、ふ、世、う、大、
 じ、の、。此、代、は、は、諸、題、な、く、而、白、く、な、い、。一、時、晴、。明、と、ハ、
 日、見、工、人、。石、の、徑、一、尺、思、ひ、か、り、不、耐、え、く、う、。胡、説、と、而、
 父、と、半、是、十、年、。水、か、心、な、ど、時、夢、瑞、連、山、入、差、と、瑞、と、
 くる、。瑞、の、神、と、い、ふ、他、な、し、。西、宮、の、市、神、縁、の、主、神、と、
 十、時、晴、り、で、指、さ、。親、と、直、空、七、明、と、人、と、似、な、う、。

一、二、五、時、ま、で、寝、る、。寒、い、か、午、後、。衣、都、へ、半、臂、。云、田、
 へ、く、と、平、は、よ、う、飯、り、さ、う、か、つ、て、お、な、。午、の、ち、や、ん、世、

二十六 後醍醐天皇親覽金堀塔竣工百萬新造の事云々
 此の中にも知るに天野三郎の申すに「得く。千箇中三郎一人の勤を以て爲す塔の役當るべしある。一人能くははたすべし」といひ、四萬塔に、當るべき勤を積むに、總じて凡そ日本に爲す塔は、四時より勤を、略し、皇恩の勤を以て爲すべし、又萬塔に當るべしといふ。又聞く、當時新造の狀を金堀寺の勤の所法堂に、公にして讀みし。

二十七 神皇正統記より云々
 今何處の如く勤を、略して親覽金堀寺也、新印見しと通す、後由是而印、靜息地也、懶觀極樂聖王臨みある。いとく、上土爲焉化、千箇中何れ一人の作する塔の境の上を爲す作也、先令通り、塔功、是より千箇親覽金堀寺、皇恩の勤を遂げし、四方を大知なり、敬信なり、一時解塔、月日勤す。

二十八 上土をよとすかといひ、後醍醐寺、三時世起、六時世起、爲政衆爲上土而始、佛報に上より申く、觀念の所起、唯た人々より是のあり、覺衆凡爲

ついでに又も書いて置きます。おしに難付でござつた所を先へつめておろす。

二六 昨夜の晴よく飯焼ます。津島島船控へたしにのたう。昨夜の船焼
焼たる御衆と歌ふ。たの御中やま。午前十時迄に焼く迄焼く。事々焼
く。午後三時に火をさし見せ無にや。鉢側へんと多勢あるやうで
なりやま。おしに三日間なりやむく意に由。やうやう水にやま。
午四時に、御せんか右船。一時中時。焼きとんでやま。ふくも腹なりや
てし得ん。市女長年申。焼きとんで。要時。名姓で九時月夜。閉
てし解除。十一時迄。延々津南船八度し焼屋。

二七 昨夜の夢。親知う打たへりや。眠る。やうやう身体が疲れてゐる。一
食ひ。一食。御知く不足。おかし。一食前を建設。午四時迄。武蔵守大氏に
眠ていふ。御せんか。焼きとんでやま。日。若く調理を。焚きとんでやま。一食。御せんか。

空襲への心配から、夜も「何回もめざめる」(2月17日) 落ち着かない日々のなか、身重の妻に代わり、具合の悪い岳父・足立文太郎の京都の自宅を頻繁に訪れている(18日)

「有史以来の非常の年」という言葉も決して大げさではない、昭和 20 年元日の日記（1945 年 1 月 1 日）

解説

高木伸幸

一九四五年度の年始から二カ月間が対象。まさに「有史以来の非常の年」である。作家個人の日記に留まらず、戦時下の日本人の生活を記録した貴重な資料と言える。

空襲や戦況に関連した記述から確認してみよう。

元旦は勤務先の宿直室で迎える。その後も幾度か毎日新聞社の「火の気ない編輯局」で夜を明かす。「防直」（防空宿直）とあるように、空襲対策として交代で夜の職場を守っていたのであろう。

一月四日の夜には「警報のサイレン」を耳にするが、「直ぐ眠つて終」う。同月二十四日には「淀川河口、中河内郡」が「爆撃」されるも、これまた「熟睡中」であった。

さらに一月十日には「敵のルソン島上陸」の報に接しながら大事件と思えない。自身を含めた国民「一

般」が「くそ度胸」を身につけ「どん感になった」と考えている。

次男卓也によれば、井上靖は悪天候のヒマラヤ山中でも平然と小型飛行機に乗り込むような「運命論と楽天的人生観」の持ち主であった。^{*1} 後年發揮されたその井上靖の個性は、実は戦時中の生活を通して体得されたものであったのかもしれない。

しかし一月三十日。「爆弾投下音でめざめ」、「飛行機の急降下の音」まで耳にした。さすがの井上靖も「初めて不安を感じる」。その後も連夜の空襲に遭い、同僚の勧めもあって、ついに家族の「疎開」を考え始める（二月九日）。自身はともかく、家族の安全を憂慮したのであろう。空襲を巡って、井上靖の心境の変遷に注意されたい。

井上靖は早速疎開に向けた準備を始めたものの、当日記に見る交渉は結局不成立だったようだ。年譜を^{*2}確かめれば、妊娠中だった妻ふみが五月に京都の実家（足立家）で次女佳子を出産。翌六月に鳥取県日野郡福栄村神福（現日南町）によりやく家族を疎開させた。そ

こに至るまでの並々ならぬ気苦労が推察される。

その一方で、井上靖は「給料前借」をし、堂本印象の絵を売って借金の返済に充てている。「小林君の会」とやらで「ウイスキー、ビール」に「満足」し、「牛肉の御馳走」になって「ハイボール」に酔いもする。前号の「解説」でも触れたように、浪費家で贅沢好きな一面がやはり確認できる。

井上靖には「福の神」のごとく度々食料を届けてくれる親族もいた。妹静子の義兄・石川佳一である。静子の夫石川明は陸軍中尉。^{*3} 佳一も海軍の「主計大尉」であった。物資不足の中でも、軍隊には多くの食料品が蓄えられていたのである。井上靖の戦時下における生活は、こういった後ろ盾もあって、庶民とは些か異なっていたようである。

かつては頻繁に見られた創作や詩人仲間、そして読書に関する記述は影を潜めている。わずかに一月三日に同僚・瀬川君の作品「花火」が「新文藝」に掲載されたところのもの、自作については全く記載していな

い。それどころではなかったのだろう。

井上靖はそうした中で、水を汲ませてもらった天野家の「若奥さん」に対して、「バケツを下げてくる」「必死な表情」を「一寸美しい」、「不幸が美しく身についてゐる」と評す（一月十九日）。天野家では前年八月に子供を亡くしており、「不幸」とはその事実を指す。^{*4} 加えて大雪の中、家族三人で防空壕に逃れた際には、「雪の日の退避、風流の極みなり」との感想を書く（二月二十五日）。前者は不謹慎の感があり、後者も本心とは到底思えない。だが、どちらも表現者の意地から生まれた文学風コメントと言えよう。

「吉田」の「おちいさん」、つまり解剖学者であった岳父・足立文太郎については、「寸陰を惜ん」だ仕事ぶりに「敬服」するとともに、「ガルシンの『紅い花』における狂人のけしの花」（傍点原文）をその姿から連想している（一月二十七日）。

ガルシンの短篇小説「紅い花」^{*5}は、癲狂院に送られた「狂人」が主人公。真紅の罌粟の花を「ありとある悪の凝つて成つたもの」だと信じ込み、「人類最初の戦

士」に成り切ってその花を筆り取って死んでいく。つまり井上靖は同作の「狂人」について、一つの物事を心から信じ、そこに打ち込んで生きる人間の象徴だと解釈した。そして足立文太郎の生きざまをそこに重ねているのである。

井上靖は後年、「狂人」の一途さにむしろ「正常」を見出す社会諷刺小説を繰り返し描いている。例えば『夜の声』（一九六七年六月二日～十一月二十七日『毎日新聞』夕刊）では、万葉集の世界の住人に成り切って生きる千沼鏡史郎の眼を通して、自然が失われていく現代社会を批判した。「四角な船」（一九七〇年九月十六日～七一年五月十六日『読売新聞』）においては、ノアの洪水到来を本気で信ずる覺なる人物を登場させ、現代社会の混乱を皮肉った。

こういった人物像の原点は、実はガルシンの「紅い花」にあり、その根底には足立文太郎への敬意が含まれていたのである。

新聞記者としては、読者投稿欄「建設」の編集を引

ないが、戦局を無定見に批判してぬく袖してゐる連中は許すべきでないと思ふ。しかし有体にみて最近の戦況は決して樂觀をゆるさない。／私は思ふ。比島決戦において万万一皇軍が不利の立場に立つことありとせば、それは飛行機、艦船の不足は勿論だが、それよりむしろ実に政治力の不足に原因すると。国内諸態勢、戦争生活の実相をみよ。果してこれで勝てるか、真に興廢の関頭に立つならばその危局に相応せる強力なる政治を断行せよ。日本のもつすべてを急速に戦力化し必勝体制を確立せよ。心ある国民は切に当局の勇断を待望してゐるのだ。

（北但・一村民）

日本民族の優越を信じようとするなど戦前の皇国思想が如実に表れている。その一方で、英米に比して日本の物資不足が明らかである故に、内心では敗戦を予感している趣もある。やむなく批判の矛先を政治に向けた文章とも言える。井上靖は多くの国民の心情を代弁した投稿と見做して取り上げたのだろう。

き続き担当。二月二十三日には社より呼び出され、同欄に対する「注意処分」かと考えている。しかし実際は違っていた。井上靖に不安を抱かせた同日『毎日新聞』（大阪版）掲載の読者投稿は次の通り。タイトルを「強力政治断行の秋」と記しているが、正しくは「強力政治の断行^{*}」であった。

率直にいふならば現在の戦局を目して一部に悲観してゐるものがあるが、それは素晴らしいか。樂觀するものは国体の本義に徹して皇国の絶対と民族の優秀を信じ、断じて勝つ、勝たずにおくものかと日常の戦域に敢闘してゐるが、悲観するものは情けなくも敵の物量に参つてゐる形だ。／私は昨年十月二日村民大会においてドイツの不敗と皇軍の大戦果近きとを予言した。私の直感に凝つては百鍊の鉄となり発しては万葉の桜となる両民族共通の魂を信じたからであつた。果然十月中下旬の台湾、比島方面の大戦果となり、ドイツはレントシュテット攻勢となつてゐる。私はあへて先見を誇るでは

二月二十六日には『建設』、二ヶ月、社会面記事として書く。この記述の通り、同欄の一月・二月分をいわば総括した記事が二月二十八日『毎日新聞』（大阪版）に載っている。右に触れた読者投稿も踏まえた文面であり、『強力政治』と『空への備え』、『建設』欄二ヶ月「声」の転換との見出しを掲げている。やや長くなるが、井上靖作成の記事として引用する。

戦局がここまで来たのだ。もはや論議の時代ではなくて、実行の時代といはれる。誠にその通りだ。国民の一人々々が身の廻りのことで戦力化すべきものがあれば即刻やらねばならぬ。さうした熱意は全国に漲つてゐるといつてよい。しかるにそれをなほ阻んでゐるものがある。それは何か。本紙「建設」欄には日々国民の率直な声が投書の形で寄せられてゐるが、ここに集る国民の声も本年に入つてからの二ヶ月の間にすっかりその面貌を改めた。単なる不平、不満、思ひつきに過ぎぬ提案提唱といふものは完全に一掃され、国内各戦

線から投ぜられる叫びは切実真摯、直接、間接の別はあれ、勝利への祈念と決意にみちてゐないものはない。半年前の両横綱「煙草問題」と「学童疎開問題」もこのところ鳴りをひそめ、さしも多かつた食品配給、買出し部隊等に関する巷の声も、国内戦場化の今日、一応その出場資格を棄権した恰好となつた。／このことは一面、買出しや闇がしてきけないとしても、当局者としては、声なき声にきき、適切な処置を食糧配給に講じなければならぬことはいふまでもない。／この二ヶ月で量的にみて断然他を圧してゐるのは政府に対する強力政治断行の要望だ。（中略）／全国あらゆる地域、あらゆる層よりこの種の投稿は殺到してゐる。今や国民は撃敵政策実施の大号令を待つてゐる。問題はこの国民の熱意を戦力化する強力な政治、特に政治の末端としての行政の断にある。もう人のことをいつてゐる時代ではないが、この期に至つてなぜもつとガンガンやつてくれないかといふ

上靖の筆である可能性が高い*。

さらに井上靖は河井寛次郎、堂本五三郎・印象兄弟、菊池契月ら京都在住の芸術家宅を頻繁に訪問し、やはり学芸記者らしき行動を見せている。帝室技芸員に任命された堂本印象に贈る記念品の製作を河井寛次郎に依頼するなど、概ね職務として動いていたようだ。しかしその上で、彼らとの交流自体も目的であつたのは文面から明らかである。特に河井寛次郎には「追想記風」の文章を読み聞かせて貰い、「見方の面白さ」を感じる（一月八日）。奥さんからお茶などで饗応され「気持よい家」と思いつつ、「河井さんも戦局を憂へてゐるといふよりも暗いものを見詰めてゐる」と察する（一月二十五日）。まさに河井の人柄に深い感銘を受けていたのである。

一月二日には「（堂本）五三郎氏の家に立ちよ」つてゐる。「卓也入院中のお礼を兼ね」た訪問とある。前号掲載の日記に詳述されていた次男卓也の入院中、五三郎はわざわざ見舞に来てくれたわけである。印象とのそれも併せて、堂本家と井上靖の関係が、決して

歯がゆさは国民各層の深刻な印象だといつてよからう。（中略）／どんな些細事でも出来ることはどしどし改めよう。これは官も民も同様だ。そこに勝利への道がある。

井上靖は「建設」欄の編集を通して、様々な国民の声を聞き取つた気分であつたに違いない。その不平や疑問等を為政者に訴えるべく、この記事の筆を執つたのであろう。軍国主義に染まつていたと批判するのは当たらない。厳しい戦局の中、新聞記者の立場から当時の世相を映し取つた文章として注目したい。

以上のほか、井上靖は橋本閑雪の計報に接して「閑雪を悼む」を書いてゐる。学芸記事が紙面から消えていく中でも、美術記者の自覚を決して失つていなかったのである。同文は二月二十七日『毎日新聞』の「京都版」に掲載。『井上靖全集』第二十五卷（一九九七年八月、新潮社）にも収録された。ちなみに同日「大阪版」には橋本閑雪の死亡記事が出ており、こちらも井

仕事だけに留まらないことを示している。

しかし、井上靖は先述のごとく、借金整理のために印象の絵を手放している。不本意であつたのは間違いないが、井上靖の二面性を表し何とも皮肉である。なお堂本印象宅を訪問した際には、偶然にも「近衛さん、細川護立侯の令嬢だか奥さんだかといふ人たちが数人」と出会っている。女性たちの派手な着物に驚かされ、前首相・近衛文麿の「のびやか」な様には「憤りに似たもの」を感じる。だが「これでこそいいのかも知れない」（二月二十七日）。井上靖の人物評価が垣間見え興味深い。

井上靖は終戦後、「高原」*（一九四六年十一月『火の鳥』）と題する次のような散文詩を発表した。

深夜二時、空襲警報下の大阪のある新聞社の地下編輯室で、やがて五分後には正確に市の上空を覆いつくすであろうB29の、重厚な機械音の出現を待つ退屈極まる怠惰な時間の一刻、私はつい二、

三日前、妻と子供たちを疎開させてきたばかりの、中国山脈の尾根にある小さい山村を思い浮かべていた。そこは山奥というより、天に近いといった感じの部落で、そこでは風が常に北西から吹き、名知らぬ青い花をつけた雑草がやたらに多かった。いかなる時代が来ようと、その高原の一角には、年々歳々、静かな白い夏雲は浮かび、雪深い冬の夜々は音もなくめくられてゆくことであろう。こう思っ、ふと、私はむなしい淋しさに突き落された。安堵でもなかった。孤独感でもなかった。それは、あの、雌を山の穴に匿してきた生き物の、暗紫色の瞳の底にただよう、いのちの悲しみとでもいったものに似ていた。

当日記に記した経験がここに反映されている。詩と日記を併せて読むことで、双方をより深く味わい、戦時下の井上靖の心境に思いを馳せることができる。

秋の戦時特別美術展に出品した『香妃戎装』が最後の大作となった。その健筆はあまねく世の知るところで、書もまた一家の風をなした著書には、『南画への道程』『関雪随筆』などあり最近には銀閣寺前の自邸を提供、財団法人とし蒐蔵せる各種美術品、庭園等を一般に開放すべく準備中であつた。なほ長男節哉氏は春陽会会員、二男正躬氏も洋画家である。

*8 引用は『井上靖全集』第一巻（一九九五年四月、新潮社）に拠った。

〔付記〕当時の『毎日新聞』（大阪版）本文は句点のみで読点を用いていないため、紙面からの引用では読点を補っている。また旧字体は新字体に改めルビは省いた。

*1 井上卓也『グッドバイ、マイ・ゴッドファーザー——父・井上靖へのレクイエム』（一九九一年六月、文藝春秋社）。

*2 藤澤全『若き日の井上靖研究』（一九九三年十二月、三省堂）、藤澤全編『井上靖年譜』（『井上靖全集』別巻、二〇〇〇年四月、新潮社）参照。

*3 *2に同じ。

*4 『終戦前後日記③』（二〇二四年十二月、『伝書鳩』第二十五号）の本文「一九四四年八月十一日」参照。

*5 神西清の翻訳で、「紅い花」を巻頭に収めたガルシン『紅い花』が岩波文庫より一九三七年九月に刊行されている。

*6 一月十日の「建設」欄には、「断行の秋」とのタイトルで「強力政治」を訴えた読者投稿が掲載されている。こちらと二月二十三日掲載分を混同した誤りであろう。

*7 橋本関雪死亡記事の文面は次の通り。
橋本関雪画伯

帝室技芸員、帝国芸術院会員橋本関雪画伯は廿六日午前一時四十分京都左京区浄土寺石橋町の自邸で狭心症で急逝。享年六十三。葬儀は廿八日午前十一時自宅で密葬執行、本葬は三月十一日の予定。同画伯は神戸出身。本名橋本関一。片岡公曠、竹内栖鳳に師事し、のち南宗画を研究。支那各地および欧州各国を歴遊。『玄猿』朝日文化賞を得た『馬』など幾多の名作あり昨

◎『井上靖研究』第24号 目次紹介

論文

高木伸幸「寒月がかかれば」（『あすなろ物語』）における梶鮎太像の変貌——〈青春の目覚め〉と〈作家への目覚め〉

大井一郎「井上靖・竹本辰夫往復書簡——作家デビューを支えた木本の友人——」（上）【考察編】

小田島本有「史実の隙間を埋める想像力——『おろしや国酔夢譚』論」

毛鋼「『古代ベンジケント』論——アマチュア考古学者の物語」

西座理恵「井上靖と『怪異』——説話としての『狐火』」

エッセイ

十文字修「随筆『佐渡の海』を読み解く——日本で一番美しかった浜辺を探して」

小関一彰「『敦煌』と西域ルネサンス」

黒田佳子・宮崎潤一「長泉町井上靖文学館企画展 講演」

作家「井上靖」と曾祖父

砂野礼至（井上靖曾孫）

井上靖というと、平成生まれの私の世代でピンとくる人はなかなか少ないのではないか。私は授業で井上靖について学んだことがない。昔の教科書には井上靖の小説が掲載されていたようで、読書感想文にもよく取り上げられていたそう。もちろん、私自身は毎年行われる井上靖の故郷、伊豆での記念行事「あすなろ忌」に参加したり、祖父母に話を聞いたこともあったので、それなりに知ってはいたが、それでも会ったことのない曾祖父は遠い存在だった。

現在、私はただの理系学生。大学生になってから、自分のお金で旅行に行くようになり、なるべく安く、遠くに・長く行ける場所をインターネットで調べるよ

うになった。中でも特に興味を持った国が中国である。訪中経験を持つ人とそうでない人で大きく評価が異なるからだ。そんな中、二〇二五年四月、日中平和発展促進会理事長の志賀建華氏から連絡をいただき、その年の夏、中国・敦煌市に行かせてもらえることになった。このことがきっかけとなり、曾祖父の著作物を手にとってみた。

敦煌と井上靖には深いつながりがある。井上靖の長編小説「敦煌」は、敦煌を舞台にした西域小説であり、莫高窟に残された莫大な文書群に焦点が当てられている。この小説「敦煌」が日本人のシルクロードへの興味を引き起こした。一九八〇年からNHK番組「シルクロード」が放送され、日本にシルクロードブームが

巻き起こった。この影響もあって一九八〇年代には敦煌の訪問客の七割を日本人が占めた。敦煌市には、現在でも日本語を話せるスタッフが三十人以上もいるらしい。

敦煌に到着し、まず初めに、特別館を含む十二個の莫高窟を見学した。ここで驚いたのが、ガイドに小学生が含まれていたことだ。しかも、敦煌方言でなく標準的な中国語で案内をしている。授業で莫高窟ガイドの仕方を学んでいるそうで、後日小学校視察の際、その様子を見学させてもらった私は、驚愕するとともに、中国らしさを全身で感じた。

実際に窟に入ると、その涼しさにびっくりした。外が三十五度近い暑さにもかかわらず、中は二十度弱の温度であった。天井・壁一面に壁画が描かれていた。この小乗仏教を題材とした壁画には時代的な変化が見られる。五世紀頃には、複数の場面を連続して描く小乗の主題が後壁や側壁に多く配置されていたが、六世紀後半頃になると前壁に描かれるようになり、やがて

天井へと展開していった。この壁画を見た時に同行した人達の反応が多種多様で面白かった。描写方法、仏教的観点に加えて、窟の音環境について言及している人もいた。実際、敦煌研究院の調査報告書では、小孔や溝などが見つかっており、音の響きのコントロールを意図的に試みていた可能性が示唆されている。またこの見学の際、元敦煌研究院の馬競馳先生にお会いしたのだが、世田谷の井上宅にいらしたことがあるとのことだ。

次に、陽関見学を行った。陽関といえは、唐の詩人王維が「西のかた陽関を出づれば故人無からん」と友におくって詠んだ詩に登場する関所である。この詩は、友が官命によって西へ赴く際のものであり、地平の彼方には、親しい友の姿すら見えないタクラマカン砂漠が広がっている。陽関から外に出ればもう友もいないから今のうちに一緒に酒を飲もう、という詩である。それくらい周囲には砂漠しか広がっていない（豆知識だが、サハラ砂漠と呼ぶ人は氣をつけたほうがよい。サハラとはアラビア語で砂漠という意味で、「砂漠の砂漠」となって



陽関博物館庭園にて、館長の紀永元氏(左)、日中平和発展促進会理事長の志賀建華氏(右)と



敦煌市図書館にて、館長の方建榮氏と

しまう、とガイドの方が何回も強調していた。

この見学の際、陽関博物館館長の紀永元氏にお会いしたのだが、井上靖が陽関見学した際、案内をされたそう。

旅の途中で、私たちの歓迎式典を敦煌山荘で開催してくださった。全集含め五十二冊の井上靖の著作を祖

母・浦城幾世から預かってきており、敦煌市図書館へ寄付する寄贈式典も行ってもらった。市長、副市長、図書館館長などのスピーチによると、敦煌では二人の日本人が今でも慕われているという。井上靖と画家の平山郁夫氏である。二人の貢献もあり、一九八〇年代、多くの日本人観光客が訪れ、映画「敦煌」の撮影のた

めに作られた敦煌古城は、今では敦煌市の観光スポットになっているそう。そして、敦煌図書館館長の方建榮氏からは、贈呈された本の読み聞かせ会を明日行うのでぜひ来てほしいと無茶ぶりもされてしまった。

式典の後、四、五社くらいの報道機関から多くの質



敦煌市内の夜市にて、同行の人たちと(右端が筆者)

問を受けた。特に印象に残ったのが、「あなたは、井上靖が築き上げた日中関係を、どのように次の世代に引き継ぎ貢献していきたいか」だ。私はこの質問についてきちんとした答えをもっていなかった。今まで、曾祖父は私の中で「歴史上の人」だった。この質問は、井上靖と自分との関係について考えるきっかけとなった。敦煌市内の治安がとてよいことにおどろかされた。中国は国全体が北京時間を標準時間としているため、ここは夜二十二時すぎまで明るく、真夜中まで小学生くらいの子どもたちが街中で遊んでいた。私は毎日夜市で、二百円の青島ビールを片手にちよい辛に味付けされた羊肉、ロバ肉の焼き肉を食べた。

鳴沙山でラクダに乗ったのだが、乗った後にマダニがいるかもしれないから気をつけてくださいと注意された。慌てて、ホテルに帰って、服を洗濯しようとしたのだが、ランドリーはお金がかかるので、お風呂にお湯をためて手洗した。

また、同室の人と中国のインスタントラーメンをどうしても食べたいとコンビニで買ったのだが、買った

後になって部屋についている電気ポットは、その中で靴下などを入れて洗う人がいるから汚いと教わり、急いで洗剤を買い、電気ポットを洗った。そして毎晩いろいろな味のインスタントラーメンを食べた。

このようなハプニングがありながらも、井上靖が五十年以上前に残した敦煌市との関係をたどる楽しい旅になった。

今回の旅を通して、曾祖父・井上靖について自分は何も知らないことを痛感した。時間が経つにつれて薄れていってしまう記憶。これを上の世代から受け継ぎ自分のものとするので、未来へつなげていけるよう精進していきたいと思っている。



◎井上靖記念館「文豪の素顔——家族が見た井上靖」展

井上靖記念館の企画展「文豪の素顔——家族が見た井上靖」(令和七年二月三日～六月二日)は、妻・子・孫という、それぞれ異なる家族の視点から、井上靖の素顔に迫るものでした。「家族しか知らない井上靖」の紹介に加え、「井上靖にとっての家族像」も考察されています。

『伝書鳩』においても、十五号からは靖の息子・娘の配偶者の、十九号からは孫の、リレーエッセイを掲載してきました。今号では、靖に会ったことのない曾孫に寄稿してもらいました。

企画展では孫たちの文章が展示され、そのうち、木村直子「祖母から貰ったもの」(二十号)、井



上恭一「世田谷の家」と子どもたち」(二十一号)、黒田裕之「祖父と僕とケンタッキーフライドチキン」(二十二号)、黒田次郎「ふたりの井上靖」(二十四号)は『伝書鳩』に掲載されたもので、それ以外にも『伝書鳩』の冊子もご展示いただきました。

また、井上家所蔵の「一座建立」(茶道の言葉で、「いいお茶会は、一座の者が心を合せ、心を一つにして、みなで作り上げるもの」の意)の色紙も展示されました。これは、一家団欒もごく自然に行われる「一座建立」だと考えた靖が好んだ言葉です。

今後も、井上靖記念館の意欲的な企画展に期待いたします。皆様、ぜひ足をお運びください。



井上靖記念館

北海道旭川市春光5条7丁目

☎0166-51-1188

ホームページ



X



事業報告

井上靖記念文化財団事務局

一般財団法人井上靖記念文化財団と旭川市の間に締結された「井上靖記念事業の実施に関する協定」により、両者は日本文化の振興及び発展への寄与を目的に協力して井上靖記念事業を実施いたしました。

(一) 文化賞授与事業

第八回井上靖記念文化賞は、令和六年十一月一日から報道機関及び文化芸術団体等を通じて候補者の推薦を募集し、令和七年三月十五日に開催した選考委員会（選考委員は、川村湊・栗原小巻・佐々木学・高橋源一郎・建畠哲の各氏）において、言語学者の中川裕氏を井上靖記念文化賞に、翻訳家の斎藤真理子氏を特別賞に決定しました。

令和七年五月二十四日に旭川市において贈呈式及び受賞記念講演会を開催しました。中川裕氏は「今を駆けるアイヌ文化」、斎藤真理子氏は「分断を乗り越える文芸翻訳」という題目での講演でした。

なお、第七回で選考委員をお務めくださいました伴野昭人氏が退任され、第八回からは佐々木学氏に選考委員をお願いしております。

(二) 国内外における日本文化の研究助成

○国内

井上靖文学の研究団体である「井上靖研究会」の研究誌『井上靖研究』への刊行助成を行うとともに（第二十三号が令和六年七月に刊行）、同会のホームページ

管理にも助成を行いました。

○ベトナム

平成二十七年度に、ベトナムにおける日本文学、文化の研究振興のため、国際交流基金ベトナム日本文化交流センターと共同で開始した「井上靖賞・日本文学研究論文コンテスト」は第七回の募集を開始しました。令和七年八月三十一日までを募集期間とし、十月に審査の結果発表を、十二月に授賞式を行う予定です。

(三) 井上靖に関する遺品・愛蔵品の保存・公開

○本財団ホームページ

更新・管理をしました。

○井上靖記念館（旭川市）

令和六年七月二十五日、『旭川市井上靖記念館報』第二十四号の発行に協賛しました。

常設展示の他に、以下の企画展を本財団と共催で開催しました。

第一回…「井上靖の見た旭川」（令和六年六月八日～十二月八日）

第二回…「第十三回井上靖記念館エッセーコンクール優秀作品展」（令和六年十二月十四日～令和七年一月二十六日）

第三回…「文豪の素顔——家族が見た井上靖」（令和七年二月三日～六月二日）

○長泉町井上靖文学館

常設展示の他に、以下の企画展を本財団の後援で開催しました。

企画展「井上靖のメッセージ——遺したい50の名言」（令和六年三月十六日～九月十七日）

企画展「井上靖と松本清張——作家の視点」（令和六年九月二十一日～令和七年三月十一日）

企画展「戦後80年 井上靖が見た戦争」（令和七年三月十六日～九月二十三日）

○日南町美術館

展示資料寄託契約のもとに常設資料展示に協力しました。

(四) 近代文学に関する資料収集・調査研究事業

日本近代文学館との共同事業により、日本近代文学に関する蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行いました。

日本近代文学、殊に井上靖に関する蔵書・資料・アルバム・書簡等の収集整理を行う他、井上靖の資料収集・調査研究を行っている本財団機関誌『伝書鳩』第二十五号を十二月に発行しました。

(五) 講演会などの開催事業

○青少年エッセーコンクール

旭川市教育委員会・井上靖記念館・北海道新聞社主催、井上靖記念事業実行委員会共催、井上靖ナカマドの会協賛、本財団後援で、第十三回「井上靖記念館青少年エッセーコンクール」が全国の中・高校生を対象

象に実施されました。審査員長は古増剛造氏（詩人）、審査員は平原一良（北海道文学館理事長）、佐々木学（北海道新聞社文化部長）の両氏です。今年度の募集テーマは「遊」で、応募総数一八八編の中から中学の部六作品、高校の部六作品を入賞に決定しました。表彰式は令和六年十二月十五日に市内の井上靖記念館で開催されました。

最優秀賞

中学生の部…知念あいる「はないちもんめ」（沖縄県・

県立開邦中学校二年）

高校生の部…小田原迦凜「五感で遊べ」（宮崎県・県立

延岡星雲高等学校二年）

北海道新聞社賞

中学生の部…遠藤朱莉「土人形の水遊び」（北海道・網

走市立第一中学校二年）

高校生の部…平川真乃「樗の木の下で」（東京都・白百合学園高等学校一年）

優秀賞

中学生の部…大塚和々「今を遊ぶ」（兵庫県・三田市立八

景中学校二年）

高校生の部…堀川莉里「紙で繋がる」（東京都・白百合

学園高等学校三年）

井上靖ナカマドの会賞

中学生の部…西野目実亜「つなぐ」（北海道・旭川市立

緑が丘中学校三年）

高校生の部…入山夏帆「至福の時間」（北海道・旭川龍

谷高等学校二年）

佳作

中学生の部…釜道美玖「学びという遊び」（東京都・白百合学園中学校二年）、小林愛奈「いなくなった相棒」

（北海道・北海道教育大学附属旭川中学校三年）

高校生の部…岡本幸奈「「秘密基地」」（徳島県・県立脇

町高等学校二年）、中森笙子「遠くの島から」（東京都・

白百合学園高等学校三年）

○あすなろ忌

令和七年一月二十六日（井上靖の命日に近い日曜日）

に、伊豆市湯ヶ島町の熊の山墓地と天城会館劇場ホールで、伊豆市・伊豆市教育委員会・井上靖ふるさと会主催、長泉町井上靖文学館・本財団等の後援で、「あすなろ忌」が開催されました。募参ののち、「井上靖感想文・感想画コンクール」の表彰式、映画『氷壁』の上映会が行われ、開催にかかわる経費を助成しました。「井上靖感想文・感想画コンクール」は応募作品四四二点から以下の十四作品が入賞いたしました。

感想文

最優秀賞

佐藤乃愛「『しろばんば』と井上靖さん」（伊豆市立

天城小学校六年）、上田瑠海「憧れの光」（東京都・筑

波大学附属中学校三年）

優秀賞

磯凜月「人それぞれの考え方」（伊豆市立中伊豆小学校六年）、上西桜央「今日を「青春」とよぶ日まで」（東京都・筑波大学附属中学校二年）

佳作

山田彩愛「小説への興味」（伊豆市立天城小学校六年）、
村瀬瑛奈「『成長』の過程」（東京都・筑波大学附属中
学校二年）

ふるさと賞

大川こむぎ「『しろばんば』が教えてくれたこと」
（伊豆市立天城小学校六年）、平川桃愛「『しろばんば』
（伊豆市立天城小学校六年）

風景画

最優秀賞

白井祐好「思い出の天城神社」（伊豆市立修善寺中学
校二年）

優秀賞

加藤木那白「黒玉」（三島学園知徳高等学校三年）、飯
田波月「上の家」（伊豆市立天城小学校六年）

佳作

勝俣芽生「ただいま」（伊豆市立天城小学校六年）、木
村葵「むかしにタイムスリップしてみたら」（東京
都・日本女子大学附属豊明小学校二年）

ふるさと賞

安藤李桜「大好きな河鹿の湯」（伊豆市立天城小学校
六年）

（六）特定寄附事業

令和六年度においては、特定寄附事業はありません
でした。

（七）その他

本財団が直接協力したものではありませんが、井上
靖に関係する次のような催し等がありました。

○井上靖記念館（旭川市）

「週末朗読会」、①「狼災記」（令和六年六月九日）、②
「桃李記」（七月十三日）、③「信松尼記」（八月十八日）、
④「伊那の白梅」（九月二十二日）、⑤「真田影武者」（十
月十九日）

令和六年七月二十日、文学講演会「巨篇『わたつみ』
——波瀾の果ての日系人と祖国と」、講師・藤澤全氏
（元日本大学教授）

令和六年十月五日、文学講演会「井上靖「射程」と

文学の径」、講師・石本裕之氏（元国立旭川工業高等専
門学校教授）

令和七年三月二十二日、「井上靖・次女 黒田佳子氏
講演会」

○井上靖ナカマドの会（井上靖記念館内）

令和六年八月三十一日、『赤い実の洋燈』六十号発行

○長泉町井上靖文学館

令和七年三月二十九日、企画展「戦後80年 井上靖が
見た戦争」関連トークイベント「井上靖と戦争」、講
師・黒田佳子（詩人・井上靖次女）

○石川県立図書館

能登半島地震復興応援・朗読会「文学で旅する石川
——加賀・能登・金沢の原風景」（令和七年一月二十六
日）にて、井上靖の「金沢城の石垣」が朗読されまし
た。

○沼津市芹沢光治良記念館

「校歌という郷土文学」展のパネル展示（令和六年十
一月六日～二十四日）において、井上靖が作詞を担当し
た伊豆市立天城中学校と静岡県立修善寺高等学校（現
修善寺総合高等学校）の校歌が取り上げられました。

（八）役員

令和六年度の本財団の役員（理事・監事）、評議員は
次の方々でした。

理事長	浦城義明
専務理事	井上敦夫
理事	岡崎正隆 狩野伸洋 北田典子 佐藤純子
	勝呂 奏 野崎幸宏
監事	佐藤弘康
評議員	浦城幾世 相賀昌宏 表 憲章 黒田佳子 小西千寿 原田真人 三木啓史 山口 建

（五十音順）

令和六年度に、旭川市より本財団の監事をお引き受けくださってありました佐藤弘康氏が、令和七年四月一日付で旭川市教育委員会社会教育部長から農業委員会事務局長に人事異動されたことに伴い、ご退任なされました。ご指導・ご鞭撻をいただき、誠にありがとうございました。なお、新たに教育委員会社会教育部長に着任された田村司氏が後任の監事に選任されました。令和七年度の本財団の役員（理事・監事）、評議員は次のとおりです（令和七年十一月三十日現在）。引き続き、ご支援のほどよろしくお願いいたします。

理事長	浦城義明
専務理事	井上敦夫
理事	岡崎正隆 狩野伸洋 北田典子 佐藤純子
監事	勝呂奏 野崎幸宏
評議員	田村司
	浦城幾世 相賀昌宏 表 憲章 黒田佳子
	小西千寿 原田真人 三木啓史 山口 建

(五十音順)

令和六年度の事業を協力して実施していただいております「井上靖記念事業実行委員会」の委員は次の方々です（令和六年四月一日時点）。

委員長	野崎幸宏（旭川市教育委員会教育長）
副委員長	齊川誠太郎（北海道新聞旭川支社長）
委員	尾崎吉一（NPO法人・旭川文学資料友の会会長）
	佐藤弘康（旭川市教育委員会社会教育部長）
	高橋いづみ（NPO法人・旭川文学資料友の会理事、旭川市井上靖記念館長）
監事	三原一仁（NPO法人・旭川文学資料友の会理事、旭川文学資料館長）
	吉田哲也（北海道新聞旭川支社事業担当）

(九) 住所・連絡先

一般財団法人 井上靖記念文化財団
〒一五六―〇〇五三
東京都世田谷区桜三丁目五番九号
電話・FAX・〇三―三四二六―九八三六

井上靖記念事業実行委員会 事務局
〒〇七〇―八五二五

旭川市七条通九丁目四十八番地 旭川市役所総合庁舎
四階

旭川市教育委員会社会教育部文化振興課内
電話・〇一六六―二五―七五五八
FAX・〇一六六―二四―七〇一一



編集後記

一九四〇年生まれの父・修一が話す少ない戦争体験の一つに、靖の作った防空壕に対する恨めしさがあります。避難しなければならぬので仕方なく入ったけれど、卓袱台が蓋になっているお粗末な作りで、とても安心できるものではなかった、親父に大工仕事は向かなかった、と。今号掲載の日記には、防空壕作りに関する記述が散見しますが、確かに作業への熱意は感じられません。やつつけ仕事の防空壕に押し込まれた息子からの恨めしい視線など、気づきもしなかったのでしょうか。

日記には「雪の日の待避、風流の極みなり」と書かれています。しかし息子である修一も、母親の作ってくれたご飯をその防空壕の中で食べる時間は楽しかった、とも話しているのですから、死と隣り合わせの環境でも、父子ともにどこかのきなようです。

叔母から『伝書鳩』を引き継ぎ、夫と共に取り組み始めてから今号で二十冊目。今後もどうぞよろしくお願い申し上げます。

西村承子

伝書鳩 第26号

発行 二〇二五年十二月二十日

編集者 西村承子・西村篤

東京都世田谷区桜三―五―九 井上芳

印刷所 株式会社 厚徳社

発行所 一般財団法人 井上靖記念文化財団

